94
744

フオン、レルヒ君
靖洲 廣本賢齋君

若越紀行

精華堂

94-74

序

こは先に「鞋の塵」と題して新潟新聞の埋め草にしたるもの、素より旅途匆々の筆のすさび、杜選と譾劣は其の半頁を目にしたる人の普く知り給ふところなり。然るを這回小林精華堂主人來りて其の單行を強請し、余をして再び「旅の恥のかきすて」を繰り返さしむるに至る。蓋し兩者の不素なる[illegible]ん。主人は[illegible]少佐の撮影に係る實景と、他の手に成れる數葉の寫眞合せて[illegible]十枚を章間に安排し、題をさへ「岩越紀行」と改めて、更に余に序を請ふ。余今に於て何をか言はん。偶々案頭に披ける「精神修養」山水號の巻頭文を藉りて聊之が序に代ふ。曰く

山水經

宇宙は無字の經巻にして、天地は自然の文章なり。巍峨たる山容は語なくして語り、澎湃たる怒濤は聲あつて語なし。山に起伏あり水に緩

21

急あり。此の山逼つて水、石を噬み、此の水開いて山、烟に隱る。此の山靈あるか、此の水神を宿すか。山は我を仙化し、水は我を淨化す蘿を捫んで烟嶺に上れば、此に百水の淵源あり。錫を飛ばして天風を下れば、此に諸山の流を集む。永平道元の山水經にいふ「諸山の脚尖能く諸水を行歩す」と、山の下つて水となるか、水の上つて山となるか、七縱八横、自在に見よ「谿聲は便ち是れ廣長舌、山色清淨身に非るなし」、これ此の經、千佛出世するも一丁を增減せず、これ此の文妙手出づるも一字を添削するなし。讀め無字の經、見よ自然の文、「北風、窓紙の隙。南雁、雪蘆の汀」妙盡き玄極まる。

明治辛亥晩夏

靖洲生誌

岩越紀行目次

陸軍歩兵大佐 堀内信水君題字

墺國參謀少佐 フオン、レルヒ君題字

香風樓の一夕……一

新潟縣物產陳列館の後庭

新潟高等女學校の弓術

「止まれ」……三

愛宕の新公園

雄辯御嬶……五

高石村と御嬶

余吾將軍の墓……八

白崎の奇景

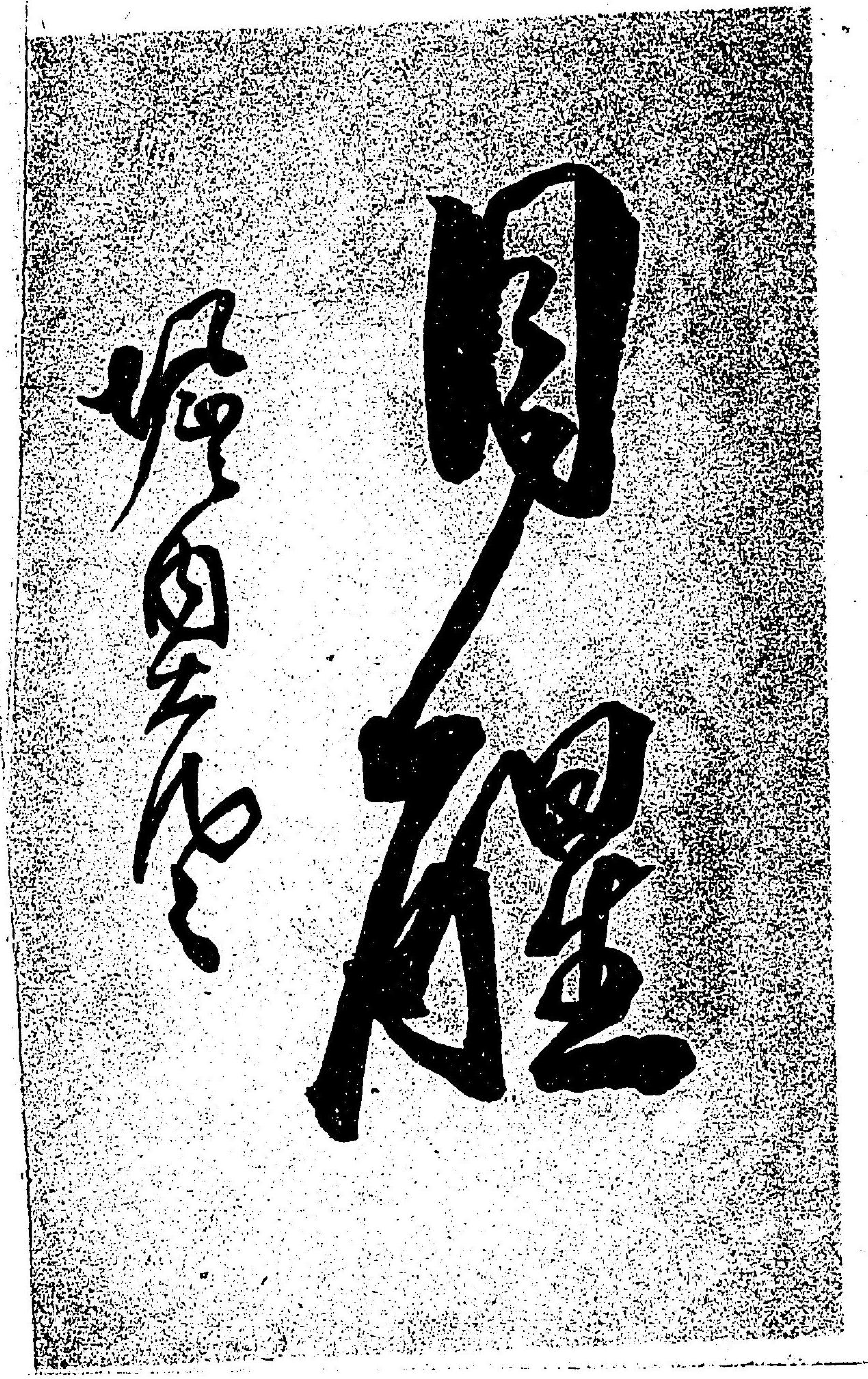
御前が淵……一〇
小鼻地の仙洞……一一
　小鼻地の洞門
津川の宿……一三
杉と藤……一四
岩越の國境……一六
　鳥井峠と「猿袴」の女
若松の一夜……一九
盤梯山に登る……二二
盤梯山の頂……二六
上の湯……二九
　盤梯山噴烟の景
噴火の神……三二
盤梯山の破裂……三五

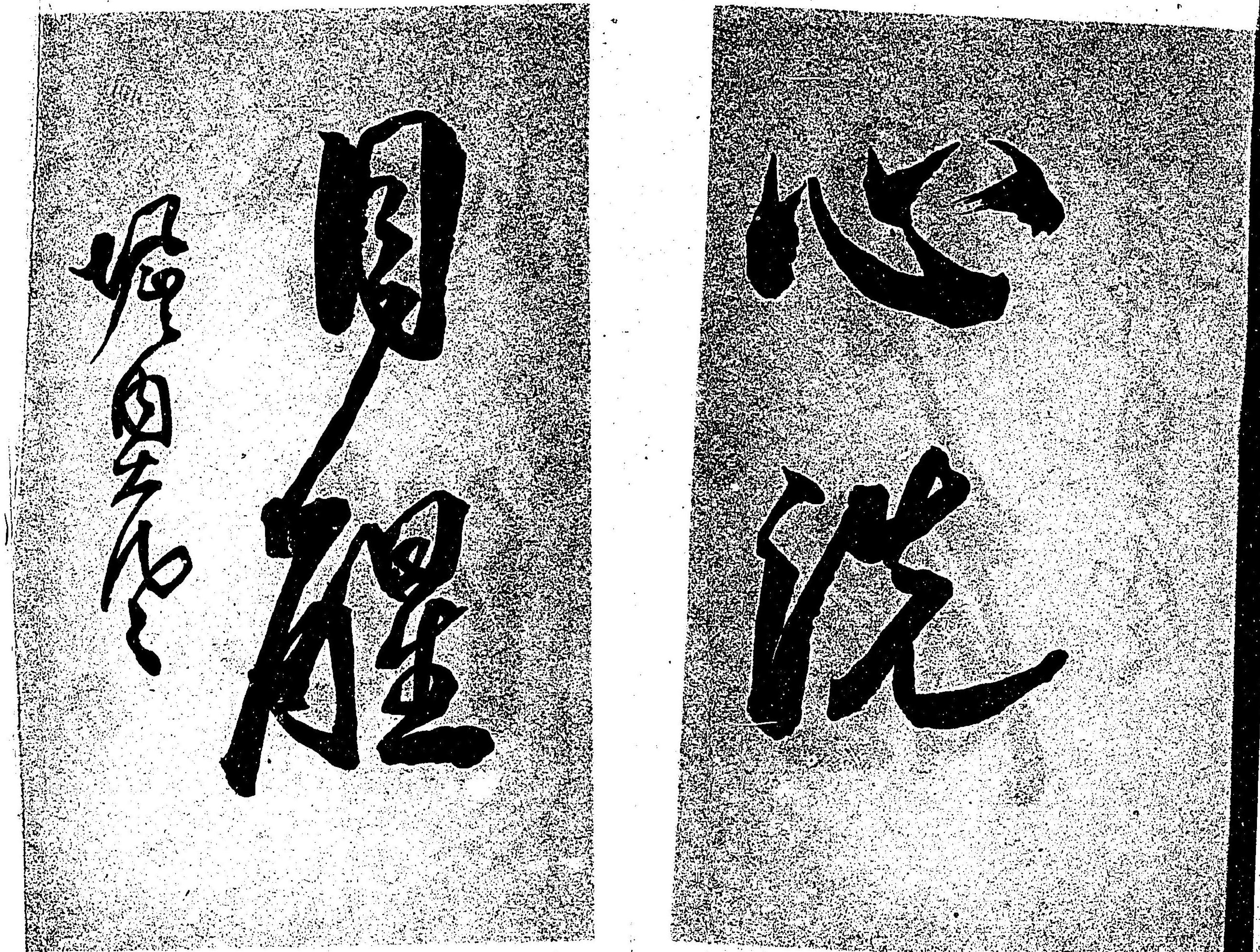
戸の口……三九
　戸の口旅館と「松が枝」の佳人
猪苗代湖……四〇
長濱の絶景……四三
　長濱より盤梯山を望む
東山の第一夜……四五
白虎隊の墳墓……四六
　白虎隊自刃の圖
白虎隊の最後……四九
殘花一輪……五二
　白虎隊の墳墓
若松市……五四
若松城……五七
　戰後の鶴ヶ城天主閣

戊辰の戰……五九
先づ根を除くに在り……六二
若松城略史……六三
娘子軍その一……六六
鶴ヶ城追手門櫓址
娘子軍その二……七〇
東山の第二夜……七五
東山溫泉「向ひ瀧」
良き家づと……七七
鞭聲肅々……八〇
阿賀川を下る……八四
狐戻城址麒麟山
小鼻地の奇景……八六
阿賀川の下り舟

ローレライ……八九
小松の逆帆
硬語盤空……九一
馬下橋と著者
馬下停車場
「まだ顔を洗はないの」……九三

岩越紀行目次 終





Blaue Berge,
dunkle Wälder,
Junge Schluchten,
Wilde Bäche —

Weite Täler,
Reiche Felder,
Alte Hügel,
Heldengräber —

Steile Felsen,
Esche, Birke,
Nadel, [illegible],
Weite Fernsicht —

Blaue Berge,
düstere Wälder,
Enge Schluchten,
Wilde Bäche —

Weite Täler,
Reiche Felder,
Alte Tempel,
Heldengräber —

Steile Felsen,
Asche, Lava,
Nebel, Wolken,
Weite Fernsicht —

Stille Buchten,
Tiefe Seen,
Grüne Matten,
Hohe Zedern —

Japans Blumen,
Schmetterlinge,
Mädchenkleider,
dunkle Augen —

Japans Frühling
ist an mir vorbeigezogen.
Theodor Edler von Lerch Maj
レルヒ少佐
Mai 1911.

新潟縣物産陳列館の後庭

新潟高等女學校の弓術

岩越紀行

香風樓の一夕

レルヒ君寫景
蜻洲君執筆

越路の奥の、これは村松、雲村と云ふ旅館の裏座敷に、余は今一外國紳士と共に瘦軀を横へて居る。五月念四日の夕暉は、今し、庭の若葉を彩つて、風のゆかりか、後れ咲きの躑躅花が、二ひら三ひら青苔の上に落ちた。

外國紳士とは誰あらう、目下高田十三師團に見學中の武官で、スキー奬勵者として其の名の高い、墺國參謀少佐レルヒ君其の人である。レルヒ君は昨日新潟を訪問して知事閣下に敬意を拂ひ、歸途、村松、津川を經て、會津路深く旅行すべく、わざ〳〵此の地を過ぎつたのである。余は即ち八咫烏と云ふ格だ。

村松聯隊の將校連は珍客御座んなれと、今宵香風樓に歡迎の宴を催し、八咫烏も强ひられてレルヒ君と共に列席の光榮を蒙つた。會するもの聯隊長野澤大佐を筆頭に、二十名の干城綺羅星の如くに居列び、大佐の開會の辭で午後七時に宴は始まつた。綠酒紅燈の間を村松美人の精鋭十餘人、花と咲ひ蝶と舞うて、座は愈々佳境に入つた。軍人の會合とて大方は無邪氣淡白の中にも、レルヒ少佐は飽くまで圓熟の社交振で、流暢な獨逸語、硬ばつた英語、怪しい日本語、萬國使ひ分けで滿座を笑はせて居る。

酒酣にして數人のブッペンは、外來のこの珍客に向つて、揮毫を乞ふべく白扇を持ち出した。日本の藝妓は體軀が矮小で、美しい舞衣を長く著飾つてる樣子は、恰もブッペン（人形）其のまゝだと云ふところから、彼の地では藝妓をブッペンと云つてるさうだ。初子なるものに對して「初めの善きものは終は幸なり」、竹子なるものに「竹の綠は日本の山々を美にす」などは今宵揮毫中の白眉だ。

盃は頻に飛ぶ、不思議や、時々色は酒で味の水のやうなものが舌に觸れる事がある。如何につね〱死を決せる軍人でも、此の場合水盃でもあるまいと、頗る怪訝の念に堪へなかつた。豈圖らんや。余は野澤大佐一流の韜略に陷つたのだ。大佐少壯、左にかけては、鯨牛も及ばない豪のものであつたさうだが、一朝聯隊に長たるに至つては、全く一滴もアルコーリック飲料を口にせず、其の代り、茶を入れた一本の德利を座邊に侍らせて酒を擬ひ、ひそかに禁酒と社交の融通を計る、其茶が時々間違つて隣席の自分の盃中に紛れ込むのだと後で知れた。かくして克己自制躬を以て衆を率ゐる大佐の德行に余は深く感服した。杯盤狼藉、十一時に及んで、余等は醉歩蹌踉と宿に歸つた。

「止まれ」

翌くれば二十五日、一碧拭うが如き晴天だ。少佐はこゝに嚴しい軍裝を棄てゝ、背廣服と登山靴と云ふチョクな風に變り、余は脚袢、鞋

の行脚姿に身を窶し、一名の荷擔き人夫を傭ひ、午前七時、雲村の宿を發足した。今迄何くれと吾々の爲めに斡旋の勞を取られた小野少佐と警察署前の十字街頭で別れて、吾々は途を東南に取り、愈々「振衣千仭岡、濯足萬里流」の意氣を實行しやうとするのである。路傍の茶畑に「ほとゝぎす啼こそ渡れ打むれて木の芽摘む子が菅笠の上に」と泉圓の句を思ひ出で、二千の貔貅が常に練武の場なる廣きパレード、グラウンドを横ぎり、愛宕の翠巒を右に見て、途は漸く山中に入り初めた。

中番阪を下つて行く事一里許り、土淵が裏の畔道遥に遠山の峡に通じ、山色水光尋常のものでない。偶々二三の農夫が一町あまり先に荷車を挽いて行く、少佐は大喝一聲「止まれ」の號令を下した。農夫等はビックリ後を顧れば、一外人が自分等を景色の中に入れて撮影中と云ふわけだ、膽消ざるを得ない。「止まれ」の號令で道行く人を撮影するなどは、外國軍人たるレルヒ少佐ならでは演れぬ藝當だと、余は思はず噴き出した。かくて其の農夫等を通り過ぎる時「只今有難うゴサマ

愛宕の新公園

惜春　　　佐藤一齋

坐臨夏色入殘春。
新綠纔句雨一旬。
昨日芳魂今底處。
吊花人是戀花人。

仝　　　興風

こゑたえすなけや鶯ひとゝせに
ふたゝびとだに來べき春かは

スー」と禮を述べた。農夫等はまだ眼をパチクリさせて居る。

小面谷（こづらだに）の發電所を過ぎ、竹、桑、杉など滴る許りの新綠の中を、疊み重つた山岳に向つて進む。十一時半頃、一條の溪流に臨んで鷄犬の聲も平和な一の桃源に行つた、高石村である。紅毛と碧眼に馴れぬ女小供等は皆驚異の眼を見はつて集つて來る。こゝより崎嶇たる山路を爪先上りに陟つて沼澤山の頂で午餉（ひるげ）をしたゝめた。こゝは東蒲原と中蒲原の境界で、所謂沼越（ぬまごえ）の峠である。

雄辯御孃

是より先、高石の村端れから大荷物を背負つた一人の御孃と道連れになつた。御孃年四十五六、頗るの雄辯家だ。英語を好まぬ吾々の人夫に取つては、誠に善い話敵となつて、一見舊知の如く、兩人の談話は縷々として盡きない。「オメーさん方何處までノシますのだ」「此の

高石村と御嬶

異人さんに頼まれて津川まで行くダーよ」から始まつて、兵隊に行つ息子が一等卒に榮進した事の、村の誰々が駈落をした事の、隣の誰さんが祟られて死んだ事のと、二人は上唇と下唇のブッ附かり次第に喋り立てゝ息もつがない。「蕨もボー〳〵の時分にゃ滅法ウメーもんだノシ」などに至つては既に判斷ものだ。

　途は漸く嶮しくなり、深い谺が脚下に開いて、蛇のやうな小徑が其上緣を九折に通つて居る。一歩踏み誤まれば金輪際！身は粉末だ。鍛冶屋澤といふを通る。御嬶の説明によれば、村松の某鍛冶屋の弟子が一人、雪の日に逃亡してこゝにさしかゝり、雪頽れに逢うてこの澤で死んだと云ふ歴史が、此名の出た元ださうだ。暫くすると弘法清水と云ふ涸れた澤に通りかゝつた。御嬶は博識家で、何一つ知らぬものはない。抑この澤の典據と云つば、昔、此處に一軒の樵夫小屋があつて、或日弘法大師が其の心根を試すつもりで、冷水一杯を乞うたところ、貫慳貪にも之を拒んだ爲め、其の刹那から澤の水が全く涸れて、樵夫

の飲料もなくなつてしまつたと云ふ事だ。地下の弘法もこれを聞いたら噴き出すであらう。この外最も危險な澤二つ、流石の御婢も名を知らない。聞けば一は昨年熊が一頭捕れたと云ふ事實あり、一は藤の花が爛熳と翠林を彩つて居る。そこで少佐自ら命名式を行つて前者を熊の澤と云ひ、後者を藤の澤と名けた。蓋し適當らしい。番所屋敷の跡、小石取村など、餘り奇趣もなく、こゝに三月澤口の隘を過ぎ了りて、一望快豁の地に出た。こゝは戊辰の時、會津兵が五泉、馬下の方面より退き來り、險を扼して官軍と睨め合つた所謂五十島の渡である。阿賀の大江こゝに一曲して汪洋と南に流れて行く。

何う甘く話の熟したものか、人夫の擔いで居た吾々の荷物は御婢の背上に移つて「オレがこれから津川までオメーさん方と一所にノシます。この人はこれから村松へ還りやす」と、策略家の御婢は、津川への行きがけに、この御人善しの人夫から半分の駄賃を奪つて吾々に事後承諾を求めた。「孤舟共に渡るすら尙因緣あり」で不氣味ながら吾々

は遂にこの御媽と津川までの緣を結んだ。五十島の渡を越ゆれば津川街道だ。數十步許り行くと、路傍絶壁の上に小奇麗な茶屋がある。こゝで一休み。亭主の薦むる澁茶に渇いた喉を沾ほしつゝ、見上ぐる前面には、小杉、沼澤などの連山が紫蓋翠柱いかめしく立ち列んで、彼方の峽(はざま)から流れて來る紺色(こんじき)の水の上を、白帆二つ三つ五十島の方から順風に乘じて溯る。優美淡雅、着色鮮かにして、恰も一幅の水彩畫のやうだ。立つて絶壁の下を覗いてみた。懸崖數十仭、碧潭が其の底に渦卷いて居て、一步踏み誤つたら最後、壁上の人は忽ち潭底の鬼だ。君子危きに近かず、十分許り休んで發足した。

余吾將軍の墓

岩谷村に入つた。村は林樹に依つて平等寺の藥師佛が其邱上に鎭座まします。こは一條天皇の時、陸奥鎭守府將軍として此地に來た余吾將軍維茂が、瀧口河中より感得したと云ふ靈佛で、將軍埋骨の地もこ

白崎の奇景

ゝだと云ふことである。亭々たる老杉の下に、高さ一丈許の古碣が、風雨幾百年、弔ふ人もなく淋しげに立つて居る。

平等寺懐古　　香草

老杉拂地氣如雲。沒字碑荒苔鎖墳。
疑塚笑他漫多事。靑山終古葬將軍。

同上　　廉堂

白碕之勝赤溪奇。猛將留墳世不知。
椽筆憑君換苔石。磨崕欲刻紀遊詩。

武勇かくれなき將軍が、一個謙遜なる信佛者として、この山紫水明の間に、悠々一生を終らうとした其の風懐は、實に愛慕の情に堪ねないのである。

此村の茶屋當りに吾々を待つて居るべき御嬶は荷物もろとも見ねない。多分は津川へ先に急いだのだらうと、さして氣にも留めず歩を進め、行く〳〵、茶屋のもの、ゆき交ふ人などに御嬶の人相風體を説明

して尋ねたが、其の樣な御嬶に逢はぬと皆答へる。こうなると吾々も少し心穩ならず、急いで行つた。

御前が淵

進む程に、山容水態刻々面白く變化し來り、蜂坪、深澤なんどの小橋を渡つて白崎に出た。と對岸阿賀の川の屈曲して流脈を一變するところに、碧潭もの凄く淙々の響を送り來り、岸上には數株の老松が昔知り顏に佇んで居る。こゝは實に御前が淵の古蹟で、昔余吾將軍の末路に、一人の美形が將軍を慕うて暗夜の中を此村まで來ると、惡や曉告ぐる鷄が東天紅と鳴いた。「吁將軍已に末路にておはすに、人目を忍び夜を冒してこゝまで來たものを、夜明けなば敵に捕はれん、さらば」と、將軍の館を伏し拜み、無量の恨を呑んで此淵に投じて死んだと云ふ處である。それ以來この邊りでは鷄が鳴かない、又偶々鷄が鳴くのを聽くと、其の人必ず不祥の事があると云ひ傳へて居る。

御前が淵に、暫し千古の思ひを耽らせて又發足した。岩越鐵道工事益々進んで、偶々縣道と鐵路と相合ふ處は、土砂岩石道もせにまろび亂れて、歩行一方ならず困難を感じた。御嬶の姿がまだ見ゑない。

白川當りと覺ゆる、鐵道人夫團の合宿所とも云ふべき、長い破屋が路傍に建てゝあつて、今し、彼等は夕飯のバクツキ最中、醉つぱらふもの、怒鳴るもの、喧々騷々、遺憾なく動物の本能を發揮して、豺狼の檻かとも怪まれた。それが道行く人に見ゑるのだ、又清川の少し手前、青天井の路傍に据風呂をしつらへて、夫と覺しき男が入浴して居る其の傍に、女房がこれも一所に入浴を試みるつもりか、身に片布も著けず素裸で、手拭を以て待つて居る。こゝらは實は外國人に見せ度ない蠻圖であつた。

小鼻地の仙洞

白川を過ぎて、左は青嶂高く聳ゑ、右は巉岩亂立して、犖确たる途

小景地の洞門

の漸く窮まるところ、仰げば一大黝岩高く天を貫き、蒼松石罅より横生倒生して奇雅恰も空中に舞つてゐるやうだ。其岩腹を穿つて一の隧道が出來て居る。長さ二十余間、暗中歩々鞺鞳の響をなし、森閑として實に仙界の門かとも思はれた。本尊岩のトンネルとはこゝの事で、天工の優、人工の壯、本尊岩は確に見逃すべからざる奇蹟である。

九里の長途を踏み破つて津川の麒麟橋を渡る頃は、早や夕霧深く立ちこめて、戸々の燈火阿賀の川の清流に映じてゐる。御嬶はまだ見ゑぬ。こうなると吾々も少し疑念を高めざるを得ない。あの雄辯家で策略家で、而も何處のものとも何の誰とも確めて置かなかつた奴であるから、或は吾々の貴重な荷物と其まゝ、ドロンを極め込みはせぬか、文明の世に異しい事だ、兎も角もと云ふので菱屋に投宿したが、取り敢ゑず入浴の道具もない。旅具一切は御嬶の嚢中に收まつてるのだ。少佐と吾は顔見合せつゝ沈み込んで居ると、來た〱、御嬶は滿身これ汗と塵になつて來た。聞けば彼女は岩谷村の知己に立ち寄つて、蓋(かさ)

を棄て衣を更へ、前とは全く變つた姿となつて、大急ぎに清川當りまでノシ行き、暫く山中で一と唸り糞い小山を築いてる間に、吾々は其處を通り過ぎて了つたのだ。然もあらう、行ひ交うた人も知らず、吾々も知らずに長驅したのだ。「渡る世間に鬼はない」に、かくして人に誤られて、一生不遇に終るものも世には少なくない譯だと、御嬶が氣の毒になつた。

津川の宿

菱屋の座敷、調度、待遇少からず少佐に滿足を與へ、其日は二人で夕餉の食ひ角べを試みた。余は飯四碗、少佐は七碗、外に肴二種の御かはりを申付けて、余の大敗に歸した、少佐は微笑して曰く「機械のより大きいのは石炭をより多く要する、僕の君に勝つは當然だ」と、夜、この町の町長、署長等の諸君來訪、十一時床に入つた。

二十六日、晴、ムックリ起に朝飯が出た。レルヒ少佐も今朝は七碗

の元氣はないらしい。丸切の蓮根を食ひつきながら、「此の蜂の巣は何です」。「御猪口の中を覗いてこれは何?」。「青菜の辛合(からしあひ)と云ふものです」。「頗る辛いですよ」と注意もあへず一箸あんぐり。「ア、」と叫んで涙ポロ〳〵「日本人は隨分ひどい物を食ふね」。

馬車の用意は疾に出來て、馬は頻と朝風に嘶いて居る。昨宵から羽織袴の裝束で奔走して居た亭主や其他のものに送られて、七時菱屋を立ち出た。野澤まで七里、高低斷續木魂(こだま)に響く喇叭の聲につれて、崎嶇羊腸たる阪道を紆緊して車はガタ〳〵と挽き上げられて行く、

杉と藤

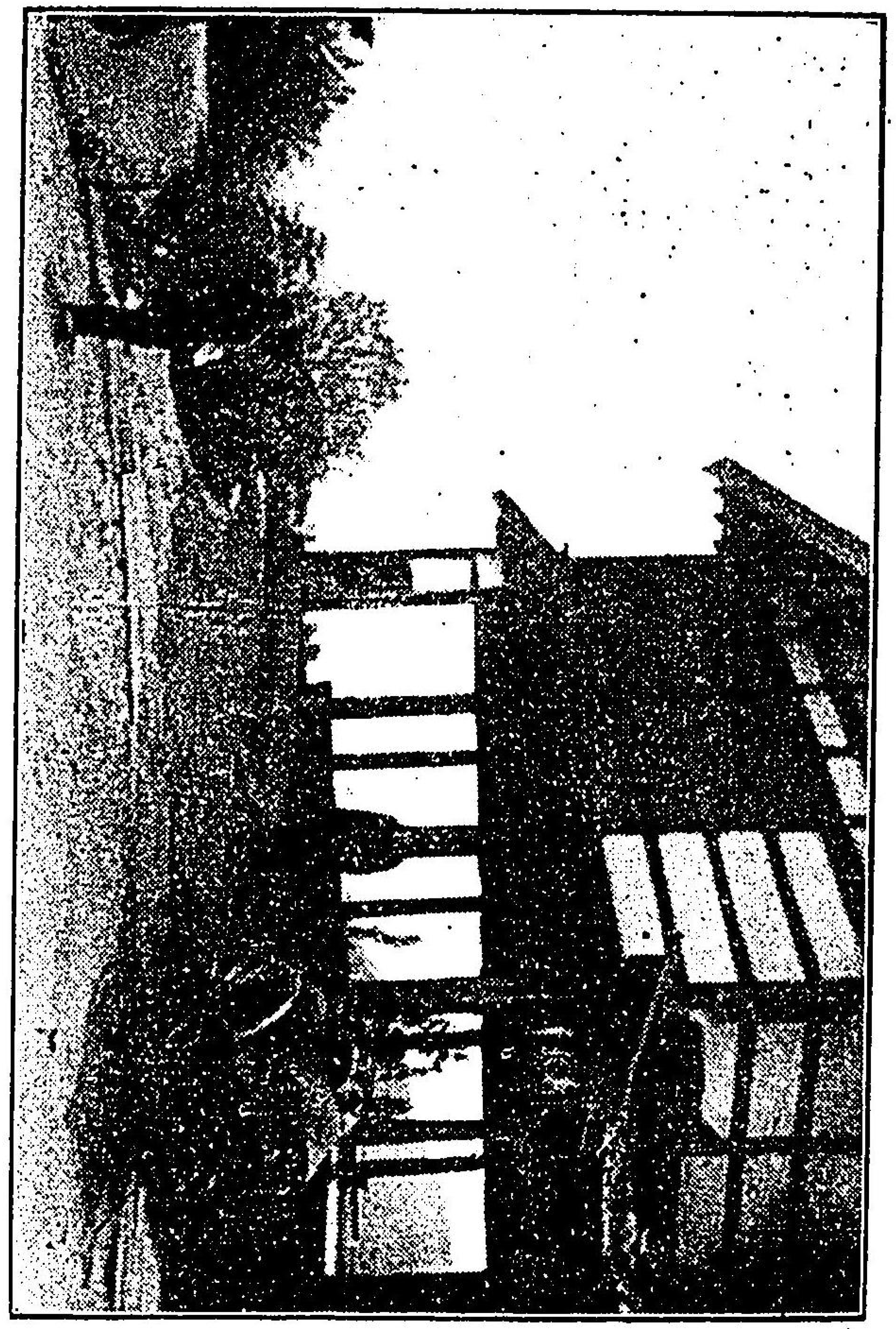
この邉り藤の花が今を盛りと碧山を飾つて、時々苔生す巖上の松に纏りついて居るところなどは、誰やらの作つた「むらさきの色のゆかりに藤の花かゝれる松もむつましきか那」を床しく想ひ起さしめる。「藤は樹に緣り人は君に緣る」とはよく言ふ辭だが、水も洩らさぬ鬱綠の

葉に掩はれて、面はゆげにゆかりの色を示して居る風情は、これやがて日本婦人の淑德に比すべきものではあるまいか、アメリカで獨立の相だと云ふてる彼の杉の樹は、亭々と雜木を擢んで、夫事すべき松をすら凌ぎ、尙中天を貫かうとする姿は、或は歐米の女尊男卑のさまに似てはゐまいかと一本試みた。少佐は威猛高の返り擊と思ひの外「ザッツ、ライト」「ザッツ、ライト」と大に贊意を表し、「婦人の跋扈して、をさ〳〵夫權を凌ぐ情なさを、常に顰蹙して居る吾々歐米人には、實に日本の夫婦相和し兄弟相扶けると云ふ秩序ある樂しき家庭を羨ましく思ふ。米國の如きは其絕頂に達して今ではむしろ持てあましの姿である」と愚痴を述べたが、實際さうだ。極端な例を擧げれば、一家の夫が朝早く起きて、酒掃、料理などの用意や命令を濟ますと、妻君が後から優々と啣へ楊枝で起きて來る。少しまちがへば早速御目玉頂戴と來る。又夫婦財産を別にして、甚だしいのは夫の客の接待費は夫が持ち、妻の客のは妻が出す。一朝誤ればすぐ裁判沙汰だ。若し財産裕ならぬも

のは、夫たるもの營々と働いて、妻君の化粧料、交際費を支給し、以て其の御機嫌を損はぬやう勉めねばならぬ。自分の虚榮心を滿たす事の出來ない時は、妻は口汚く夫を「意氣地なし」と罵る。こんな話をきつかけに、話柄は歐米の家庭、宗教、教育など細い處に立ち入つた。何時の間にか小川村を過ぎ去りて、榮山も程近い。我が藤の花はまだこの邊りにも咲き匂うて、日本婦人の萬歳を私語いて居るやうだ。

岩越の國境

鳥井峠にさしかゝる。こゝは即ち越後と岩代の國境だ。眺望頗る佳く、諸山遠く空に連り、高低濃淡一ならず、遥に飯豐の靈山を拜することが出來る、されば昔こゝに飯豐山の遥拜に供へた華表があつたので、鳥居峠の名が出たのだと云ふ。この國境にフン跨つて一戸の茶屋がある。看板に「兩國屋」と銘打つたは頗る振つて居た。峠の頂より少し下つて、見晴らしの佳い茶亭で休んだ。偶々其處を赤兒を背負ふた若



鳥居峠と「[illegible]」の女

い女が通りすがつた。此の女のもんぺ「猿袴」を穿いてる姿、頗る珍なりと見て取つて、少佐は又一聲「止まれ」を浴せかけて寫眞をとつた。まだ立ちすくんで居る其の婦人に、氏は茶屋から出した菓子皿を傾投して謝意を表した。婦人は狐にでもつまゝれたやうな心地で悄々歩み去つた。

戊辰軍中雜吟　　奥平謙輔

馬首橫槍振旅還。　相人熟視膽猶寒。
重關今日無人守。　枉使王師容易攀。

鳥井峠よりは下り坂が多いので、馬車は飛ぶが如く、笳聲參差として十一時野澤に著いた。こゝで又荷かつぎを傭うて、途を山中に取り山都停車場へ向つた。半里程行くと、丘陵一面に血を染めたやうな躑躅の花が今滿開で其濃艶はねも云はれない。躑躅は自國には見ねないと云ふので、少佐は珍賞して措かず、余の説明した細大を書きとめた。支那の蜀の望帝が化して杜鵑となり、其の杜鵑が八千八聲と啼き絞つ

過九嶺　　徐跋

斷崖證路水潺々。　行到山根又上山。
眼看別峯雲落起。　不知身也在雲間。

逸題　　鬼貝

嵐にも崩れぬものや雲の峯

た血が、又化して躑躅となつた爲、この花を一名杜鵑花とも魂蜀花とも云ふといふやうな話は、一入の感興を引いたらしい。

午後一時釜石村の一丘上でパンと湯出卵を喫して午食の代りとした。こゝで余は鹽を砂糖とまちがへて閻魔顔をした醜態を少佐に發見されなかつたは勿怪の仕合せであつた。

此處より山都まで三里、村松以來山靈水神に狃れ來つた眼には、取り立てゝの奇趣も見出さず、足を運ばせたが、彼の杉の大樹が挺然林より秀でゝ翠蓋を青空に翳す姿は、實に日本特有の偉觀だと、少佐は杉木立を見る度に嘆賞して措かなつた。新潟は男の兒と杉の樹は育たぬと昔から云ふて居るが、つまり女兒を利用することが他より進んで居るといふ意味だ、などゝ餘計な話も出たが、聖キリストの磔刑に用ゐた木材はこの杉の一種であつて、嘗てソロ・モンが一本の杉を截り倒して或る沼の中に沈めたのが、後にキリストの死刑になる數日前、偶然水面に浮き出したのを、直に磔柱に用ゐたのださうだと云ふ話も出た。

信せられぬ話だが面白い。鳥井峠以來、農夫や人足どもの「猿袴」に度々逢うたが、少佐も最早「止まれ」をかける必要がなくなつた程見慣れて了つた。

愈々山都に著いた。新設岩越鐵道の終點である。渇ききつた咽をサイダー一本でなだめて、四時二十分發の汽車に乘じ、若松に下車し、こゝより人車を列ねて榮町環碧樓へと舞ひ込んだ。

若松の一夜

流石は會津第一流の宿屋、中々盛んなものだ。裏二階、二間つゞきの部屋に案内された。入浴。一體余はこの頃薄冊堆裡にのみ蟄居して足甚だ遠征に慣れざるに、村松より長途膝栗毛に鞭つて來て疲勞尋常でない。されば明日は玆に止まつて足腫と體疲を癒やす豫定であつたのを、強壯な軍人で一食七碗を平ぐる勇士レルヒ君は可哀相にも切りと明日の磐梯登山を余に慫慂する。余は其の覺束なきを答へる。數回

押しかへしやり返した末、余は遂に意を決し「九死南荒吾不厭。茲遊奇絶冠平生」と坡老の豪興を氣取つて、少佐と運命を共にする事に奮發した。

膳が出た日本料理の外に洋食二皿、其の中鯰鍋殊に甘い。鯰から鰻に話が移つて、「日本では鰻は味と價に於て珍膳の一と貴ばれて居るが、あなたは御好きですか」と尋ねると、少佐は口一杯に頰張つた顔を左右に揮つて「私は蛇（鰻、蛇に似たり）は嫌ひ大嫌ひ、魚類の中で嫌ひなものはこの蛇許りだ、よく日本の人は蛇が食へるね」と又頭を揮つた。ナール程――、印度人は色の白い、口元の小さい女は嫌ひだと云ふ話だが、異人種はヤッパリ異人種だなと妙な處で感服したが、狹い廊下を隔てた隣座敷には、二三人の紳士が酒をあふりながら侃々諤々と女子教育の根本義（?）とも云ふべき大議論を戰はして居る。と、一人が「手前の阿魔も近頃は驚く程ハイカラーになつて、しやれる、理窟をぬかす、親も大に持て餘して居る。これも皆教育制度の罪だ、イ

ヤ虚榮を貴ぶ社會の罪だ」など〻云ふ所に至つて議論は愈々猛烈になつて來た。こゝもどうやら藤の花主義の勝利で、杉の木主義の敗北らしい。此方はレルと少佐と余、來し方の追懷談やら行く手のプロークラム作製やらで、御互ブロークン、イングリッシュを振り廻して居る。己がむき〳〵、旅屋は面白いものだ。十一時就床、隣りはまだ容易に閉戰になりさうもない。

翌けの三時頃、吾等が圓な夢は、俄然ガヤ〳〵と人の語らふ音に驚かされた。昨夜の教育論士が一番の汽車で東京へ立つのであつたと知れた。それからと云ふもの、顛轉反側、幽に聞ゆる明け烏の聲、折々廊下を傳ふ下婢の足音など、夢となり現となつて、容易に再眠が就らない。遂に時計は五つを打つて豫定の起床時間とはなつた。少佐の不平は蓋し余の不平と同量であつた。公德論、東西旅館の比較論などの出たのもこゝであつたが書くことは略さう。

盤梯山に登る

二十七日、晴、朝食、結束、人力車と用意滯りなく運んで、六時五十分、若松發の列車は吾等を載せて般々と盤梯山の麓に向つた。平野茫々、廣田、大寺を過ぎて左手の車窓の望むと、盤梯山は旭紅を頂の八朶に受けて長天の碧と相映じ、所謂會津富士の面目いかにも玲瓏と露出されて居る。翁島停車場に下車、こゝは名に負いた一寒村だ。思ひ出多き磨上原の古戰場を横ぎつて押立温泉に立ち寄り、こゝで一人の「强力」を賃ひ、飲料草鞋なんご用意して、午前八時愈々盤梯山の頂へと志した。途はつまさき上り、見渡す限りの青野原は綠の波をたゞよはせて、菫、蒲公英の盛である。

盤梯山は古人の歌にも「名も高きいはゝし山や大空にのほれる道と見ゆわたるか那」とある通り、四隣の雜山から孤立して、巍然として天空に聳ゐて居るまことに雄大な山だ。余はこの種の山岳を見る毎

に、いつもコルリッヂの傑作、モン、ブランの詩を思ひ出さずに居られない。

オー、畏敬すべき、沈默せる山よ、汝を凝視する時、汝は依然肉眼に見ゆるも、終には我心の外に消ゐ失せて、恰も祈禱の時に於ける見ゐぬ大御神の如く、又妙なる音樂が漸次我魂と融合して其の諧調に醉はしむる如く、汝を見れば生命と生命そのものゝ秘密の喜悦と相融合して、神魂遂に汝の幻影と感應するに至る。

よくは覺ゐぬが、ザットこんな意味であつた。この山に對してこの詩を念ず、實に莊大秀靈の氣に打たれ、恍惚として神人感應するの思がする。

盤梯山春靄圖　　盤　溪

三峯縹緲杳難攀。萬仞丹梯天際盤。
莫是群仙遊戲會。瑤笙聲在彩雲端。

「御籠堂」といふに小憩した。こゝまでは途餘り嶮しからず、遠望漸

く佳境に入つて、猪苗代湖が鏡のやうに低く見ゑ初めた。歩一歩風が冷かになり草木も亦漸次高山性に移つて黯黒な土の上に二三尺の櫟、榛、イボタと交つてヤナギサラ、クリウツギ、ハンゴンサラなど意氣地なく疎生して居る。ころ〳〵した焦石や、ざく〳〵した爛砂も、次第〳〵に多くなつて來た。されどこの矮樹萎草の間には指頭大の花を著けた山櫻の長さ二三尺、盆栽にもしまほしいものが所々黑土の上を彩つて、到らぬ隈なき春の女神の公平を示して居る、進むに從つて山勢漸く嶮峻、途は覺束なきまでに細まり、荊棘を披きつゝ辿りゆく間にも、亂石怒り起つて鞋を刺し、歩一歩と行路難を加へて來る。遠くかけはなれた少佐は、ふり返つては余に「確かりし給へ」と激勵の聲を浴せた。斯くて麓より二里も上つたと思ふ頃、白雲襲ひ來つて天地を白盡し、眼見ゑず、足進まず、茫邈として夢のやうになつた。激勵の聲のみ遙に天の一角より落ち來る。情ない。と、天風一陣ピユーと吹く、雲霧が又一掃する、高山にあり勝の變幻極りなき間をトボ〳〵と

登つて行く。暫くすると最も嶮峻の場所に出た、左は灌莽に塞がれ、右は斷崖、生と死の分け目は一歩の誤りに過ぎない。忽ち鶯の聲が聽ゑる、朗々玉のやうだ。嗚呼こんな嶮峻な山中にも鶯は居るか、否々鶯に取つては、山中の嶮峻は人心のそれよりは輕い、居る筈だなどゝ考へながら、余は奮躍して上り、遂に少佐に追ひ著いた。一大岩石途に當つて横はる、少佐も余も「强力」すらも幾度か辷り落ち、辛うじて越ゑ了すと、頂めいた處に出た。こゝに寸憩した。雲霧脉下に生じて、靈凉身に迫り、翠碧が間々雲間より隱見ゆるさま、山靈吾等を弄ぶかと思はれた。絶頂はこゝより半里と云ふ、雲を蹶つて又進むだ。災石足に當つて痛み堪ゑ難く、「强力」と少佐は已に雲の上に在つて影さへ見ゑない。路傍にはイボタ、榛、山櫻など盆栽式の美しい矮樹が密生して、鶯はこの邊りにも玉をころばせて居る。けれども今更此等のものは余に何の慰樂も與へない。疲絶！　困絶！　「行き〳〵て倒れふすとも萩の原」と旅に病んで吟じた曾良を氣取たのでもないが、余は

路傍の芝生に、雲を褥としてゴロリ身を投げた。事、此に至つては、少佐も自分もありやしない、賢もなく愚もなく、天地乾坤打して空々、グーッと眠入り込んで了つた。………、すると、「ミスター、ヒロモトー」と云ふ聲が何處よりとなく耳に響いた、それが十萬億土の彼方より來る如來來迎の御聲とも聽ゑて、フト眼を覺ますと、身は數千尺の雲上に居るのだ。この寸眠に多少の勇氣を得て、余はヒタ上りに上つた。二三町も上つたと覺しき頃、先著の少佐と余は、今海拔六千尺の高峯盤梯山の絶頂に來たのである。吁この時の痛快は何とも譬へやうがなかつた。

盤梯山の頂

神代よりわたしそめけん陸奥の
　いはゝし山やあやにかしこき　　國禮

絶頂には盤梯神社と云ふ石の祠が寒さうに立つてゐる。白雲尙滿山

に彷うて展望意の如くならず。そこで祠前の石ころの上に坐つて辨當を開いた、餓ゑたる時は食を撰ばず。況や淸水旅館が吟味を重ねての御馳走だもの、頰ぺたの痛かつたのは無理はない。瓶中一杯の冷水、これも甘露だ。する中に天飈空に鳴るかと見れば、滿山の雲忽ち一掃されて滿眸これパノラマ！、レルヒ君は「ハラー」を叫び、余亦た「快哉」を叫ばざるを得なかつた。暫くは恍惚と眺め入る、身は正に中天に在つて、呼吸帝座に通ふかと怪まれた。

眥を決すれば、北は羽前の月山、湯殿山等烟霞縹渺の中に隱見ゑ、飯豐山は越羽の兩國に跨り、六千尺の秀嶺白雪皚々として會津の平野に望み、南の方布引山は延亘十里さながら布を引くが如く、脚下に明鏡の横はるは猪苗代の大湖にして、素練長く敷くものは、日橋、鶴見の大川である。東北、吾妻山、沼尻山は近く指顧の中に位し、又半里の西方よりは噴烟濛々と立ち昇つてゐる、實に大景だ。この大景の中に在つて、尙脚下荊莽の間より鶯の聲を聽くを得るは、この山獨得の

不思議である。又余に取つては、盤梯山の頂に立つて、歐洲人と會話を操るは又一の不思議たるを失はない。

頂に止まること半時あまり、元氣全く恢復して、吾々は更に途を頂南の噴火口に取つた。一綫の危路斷崖の上に通じ、樹に縋り、石に匍うて進まねばならぬ、危險は尙甚しい。少佐は絶ねず余を警告しつゝ進んで行く。右手斷崖の下を俯瞰すれば、深さ數千仭、絶壁より火口原一帶に、災後の燒岩算を亂し、偃するもの、蟠るもの、皆尖端を上方に向けて、譬へば恐ろしき夜叉羅刹の眷族が、五大明王降魔の威力に服しかねて、飽までも爪を磨ぎ牙を鳴らして、其の大王の脚下に攻めかけて居る様だ。

だん〳〵西へと進んで行く、灌木雜草の間に高山特有の偃松が、焦石燒土の上に生ひ擴がつて居る。少佐は一枝、振の好いのを折つて「今宵宿るべき旅館の一番美しい女中に送るつもりだ」と云つて擔いで行つた。誰が其光榮に與かるやら。急坂を下つて熊笹、灌木の密生

した間をくぐり〳〵て又上る。

俗謠

會津萬代山は寶の山よ
　笹に黃金がなりさがる

半里許にして新噴火口の斷崖の上に出た。脚下は眼も眩まん許り深く、觸れば崩るゝ如き燒岩の絶壁、屏風の如く繞られて、不毛赤裸々の火口原より、所々、白煙濛々と立ち上り、シユー〳〵、轟々と吼ゆるさま、譬へば業死した數萬の亡者が一時に發する地獄の喚聲ともきこえた。然るに山の此方密林の間には、鶯が頻に「法華經」の始法を誦して居る。一綫の途、玆に地獄と極樂とを劃すかと想像して見ると其のコン、トラストの極端に驚嘆せざるを得ない。

上の湯

其處より少し下ると、山の中腹に客間、臺所、浴室を合せて間口十間奥行四間許のいぶせき堀立小屋がある、これが盤梯温泉上の湯唯一

磐梯山噴煙の景

の大旅館で、夏期に入ると蒲團や米を脊負つた紳士や、醤油、鍋釜を提げた淑女諸君が、續々とこの大旅館に押しかけて來ては、湯治保養をするのださうだ。湯は攝氏六十五度位で、多量の硫酸、鐵、少量の鹽素、加里などを含んで居て、胃病、神經病等に特効ありとの事だ。こゝはなか〳〵風景が奇拔で、南は山を脊負ひ、西は猫摩嶽と相對し、北は爆裂の際、投げ出された岩塊壘々と積んで、滿目荒寥、鏡の如き檜原湖を眼下に見下し、遠く米澤堺の山嶽を望み、東方は直に爆裂の跡となつてゐる。噴火口を實見するには、此處より入るのが最も好都合だと云ふ。少佐は是非、自分と共に行つて實見せぬかと余に勸めた。が、余は山上よりの遠望で大方は知れたればと云うて斷はる、實は足腫の痛が到底この遠征を許さないのだ。さらばとて少佐は強力と共に噴火口探險の途に上つた、壯んなものだ。

居殘つて、余はこの大旅館の主人と種々興味ある會話を試みた。主人と云ふは容貌魁偉、色黑く、目圓く、鬚髮蓬々、襤褸の上に繩めき

たる細紐をしめて、山賊其のまゝと云ふ豪物だ。併しこの豪物も頗る物識りで雄辯家だ。津川街道で紛失したあの御嬶と結び附けたら一對の好夫婦が出來やうにと余計な事を思ふた。

今彼の話の二三を概錄して見やう、

この山腹には沼池四十八あつて向ふに見ゆる三大湖は檜原、小野川、秋元で何れも小盤梯の噴火後に現はれたものだ。其中檜原湖が一番大きく、五六尺(?)の鯉をはじめ、赤ハラ、ヅアナ等デッカイのが澤山居る。この湖は元、檜原と云ふ村落であつたのが、爆裂の際砂石の堆積した結果、長瀬川の水が湛ねて湖水となつたので、多くの大木が水底にニョキ／＼立つて居て、網を投ずることが出來ない、そこで時々鐵砲を以て、水面に浮んで來る五六尺の奴を打ちとめるのださうだ、眉に唾もんだ

檜原湖が出來て後間もなく、其處から二里計ある雄國沼と云ふ池に住んで居た「主」で、驚く勿れ長さタッタ一丈五尺の大鮎が、或日

この新開の大湖へ鞍替へするつもりで、二里の長途をば林を分け榛を仆して侵入し、遂に其の目的を遂して、今でも其の湖底に鎮座ましますと。これは實際の話で現に目撃したものが二人ある。尤も二人とも其の後すぐ落命して了つたと云ふことだ。話もこれでどうやら落ちたやうだが、眞面目腐つて話さるゝ處に價値がある。

此の靈山には測候雪とも云ふべき雪があつて、五月半頃、山腹の或る一處に消ね殘つた雪が、牛の形になれば田を耕す事を知らせ、又鳩の形になれば豆を蒔く事を知らすのだそうだ。前のを「牛雪」と云ひ、後のを「鳩雪」と云うて、近郷の百姓は皆この雪を見て耕作の時期をトすとの事だ。

噴火の神

元、破裂前の磐梯山は、千古の喬樹鬱々と茂つて晝尙黯く、こゝに恐しい天狗様が、猛獸毒蛇を家來として棲んで居た。されば山の

圍一帶に七五三を張つて、何人と雖も寸歩も其の中に入ることを許さなかつた。若し其禁を犯すものがあると、忽ち天狗様の靈罰で、何處からともなくゴー〱と惡風が襲うて來て其人を吹き飛ばすか、又は家來筋の猛獸毒蛇が出て來て其の人を殺傷したものだ。ところが何處の何奴が神戒を破つたものか、天狗様の逆鱗に觸れてこの破裂の災厄が起つたのださうだ。

「天狗様は其後何うしなすつたらう、まだ此の山に居なさるか」と尋くと、主人公膝乗り出して「居なさるとも、あの噴火口の中サ入つてゴー〱呻つて居さつしやる」と、飽迄噴火の天災を天狗様の靈罰だと信じて眞面目なものだ。「いかにもあの噴氣と鋭い音は天狗様が今も尙あの孔の中に在つて、人間の墮落と不敬を怒り罵つてるのだらうね」と云ふ意味の相槌を打つた。主人は大得意、澁茶の外に麥湯を出して特別の御馳走をしてくれた。迷信談もなか〱趣味あるものだ。

西洋の火山（ヴォルケノー）に就てもこれに似た神話がある。序に書いて見るも、多寡が蛇の足を添ゆるに過ぎまい。

山にも海にも特別の神が居ると思ふた羅馬や希臘の時代では、矢張火山にも一の神が棲んで居ると思ふたのは無理はない。希臘人はこれを「ヘフエストス」と云ひ、羅馬人は「ヴルカン」と云つてゐた。此の神は當時噴火最中のシ、リー島、エトナ山の下で、三人の「一つ目小僧」を助手として、鍛冶屋を營んで居た爲め、エトナを「ヴォルケノー」と云つた。それが今は何の火山でも「ヴォルケノー」と云ふやうになつた。一體この「ヴルカン」神は頗る附の醜男子であつた故、母神ジユノーが、こんな醜男をオリンプスの神群中に置くのは耻だと云ふので、無情にもこれを下界につき落した。其の時「ヴルカン」は足を傷けて跛となり、醜の上に又一醜を加へた。そこで時々復讎する爲に破裂や噴火を起すのださうだ。けれども棄てる神あれば拾ふ神ありで、職業柄、ショーブの電光や他の神々の持道具などを作つてやつた爲め、

世話する神あつて、遂に「ヴイーナス」と云ふ絶世の美神を娶つたと云ふ事だ。其れから起つて美人と醜男子の夫婦を「ヴイナス、ヴルカン」と綽名するか何うか其處までは知らない。

盤梯山の破裂

抑々盤梯山は大同元年（?）の破裂以來久しく休火山であつて、山頂の中央に舊火口の跡が沼の平と云ふ窪地になつてゐる。其の周圍に大盤梯、小盤梯、赤埴、櫛ケ峯の諸峯が立ち列んで。所謂外輪を成してゐる。明治二十一年の爆裂の時は其の中の小盤梯の北半が投げ出されたのである。今其の時の模様を聽いて見ると、七月十五日の朝俄に大地震動した。萬雷の一時に落下し來る如き音響を發するかと思ふ間に、小盤梯山の頂が破裂して、黒烟天を覆ひ、天地晦冥、灰を飛ばし、石を降らし、熱泥を迸出し、其熱泥と土石は山を成し谷を埋めて、雉子澤細野、川上等の數村落、片礎も留めず地下に沒し、ガスに窒息した

り大石の下に壓し殺されたり、熱泥に燒け死んだりしたもの數百人、灰砂堆積の場と化した被害地七千餘町歩に亘つて、其の慘狀は到底筆や舌に盡す事が出來ない。

此の急變に駈け集つた人々は、斃れた屍體を收容する、壞れ屋や石の下から壓者を掘り出す、死者の多くは土沙の中に埋まつて、折柄の炎暑にむれ腐れる、惡臭紛々鼻持がならない。蠅がウヨ〳〵と焦土の上に集まる、其の下を掘ると必ず屍體が發見される、其の屍體が不思議に皆素裸だ、蓋し衣褌は燒げて無くなつて了つたものらしい。上の湯の亭主は最後にこんな悲慘な話もした。

或老人が兒を一人連れて湯治に來て居たところ、スワ破裂と云ふので急遽山を下らうとしたが、老體ではあるし兒は背負うて居るし思ふやうに走れない、其のうち降りしきる土沙灰燼は堆く積つて、見る〳〵自分の腰までも埋まつて了ふ。一歩も步けない、背中の兒は泣き叫ぶ。絕對絕命！せめて愛兒だけはと思うて、自分は土中に埋

りながら、右手で其の兒を高くさし上げて居た。スルト焦けた大石が一つ、ドサツと其の兒の上に落下した。小供は蹄下の蛙のやうに潰れる、老人の右の腕はもぎ取られる。こうなると老人は夢中だ。何う藻搔いてか一目散に逃げ出して麓に著いて吾に返ると、愛兒と自分の右の腕は無かつた！、

野も山も埋もれはてゝ亡き人に
　手向けの花を折るすべもあし　　乙羽

午後四時頃レルヒ少佐は意氣揚々と噴火口の探險から凱旋して來た。今其の語るところを聽くと、

嶮しい斷崖が屏風のやうに三方を繞つてゐる火口原の底は、無數の噴氣孔があつて、岩窟の隙間から白烟が絕間なく迸出して、殷々轟々、或ものは遠雷の如く、或ものは大馬力の汽鑵のやうな音響を立てゝ、銳い硫黃の臭が窒息せん許り、熱い岩塊や、砂礫の間を流

れて來る水は皆硫黄性の熱湯である。「强力」は幾度か自分を警告し、自分が火口に、より近く進めば進む程、より高い聲で「危い」「危い」と叫ぶ。そこで噴火の實景をコダックに收めて還つた。

余は寸安を貪つて、共に其の奇觀を目擊しなかつたのを大に遺憾とする。上の湯を辭して山角を一轉すると、遙か谷底に一戸の茅屋が見ゑる、あれが中の湯だ。此處から麓まで、大盤梯と谷一つ隔てた西手の山路を取つて下山した。所謂温泉道とて今朝の登山道と比して頗る樂で、忽ちの間に山麓に達した。白い澤梨と赤い蜀魂花が萬綠の灌莽を彩り、丘陵起伏、一望千里、この快豁な裾野を少佐はオーストリヤン式だと云ふて激賞した。又このオーストリヤン式曠野を、六尺優(ゆた)かの大男がノールウエイ服に登山靴を著けて握り太のステッキ打ち振り、ノソリノソリと動き行くところは、正にこれ大陸式の壯觀だと後から見た余は面白く感じた。

戸の口

鈴木竹陰

背後の山から落とし來る閑古鳥を聽き流しつゝ、夕陽淋しく照らす磨上が原を越ゑて翁島停車場に著いたのは午後の六時、玆に「强力」を他の案內人と更へて、かの白虎隊苦戰の塲なる猪苗代湖畔の戸の口村へ足を向けた。高森山の樵徑を一時間許り南へ駈け拔けると、猪苗代の大湖がパッと前面に展開した。暮靄の迫つた廣き湖面は、紫紺の潮が漲つて、遠巒を彩る夕雲が紫より樺となり、樺より鼠色と移りゆく景色が實に繪のやうだ。湖水鑿通工事で有名な十六橋を渡つて、吾等は戸の口村五十嵐家に旅裝を解いた。

夜過十六稿

寺遠不聞鐘鼓鳴。河聲滔々奪吟聲。
人家寂寞燈明滅。十六橋頭月影淸。

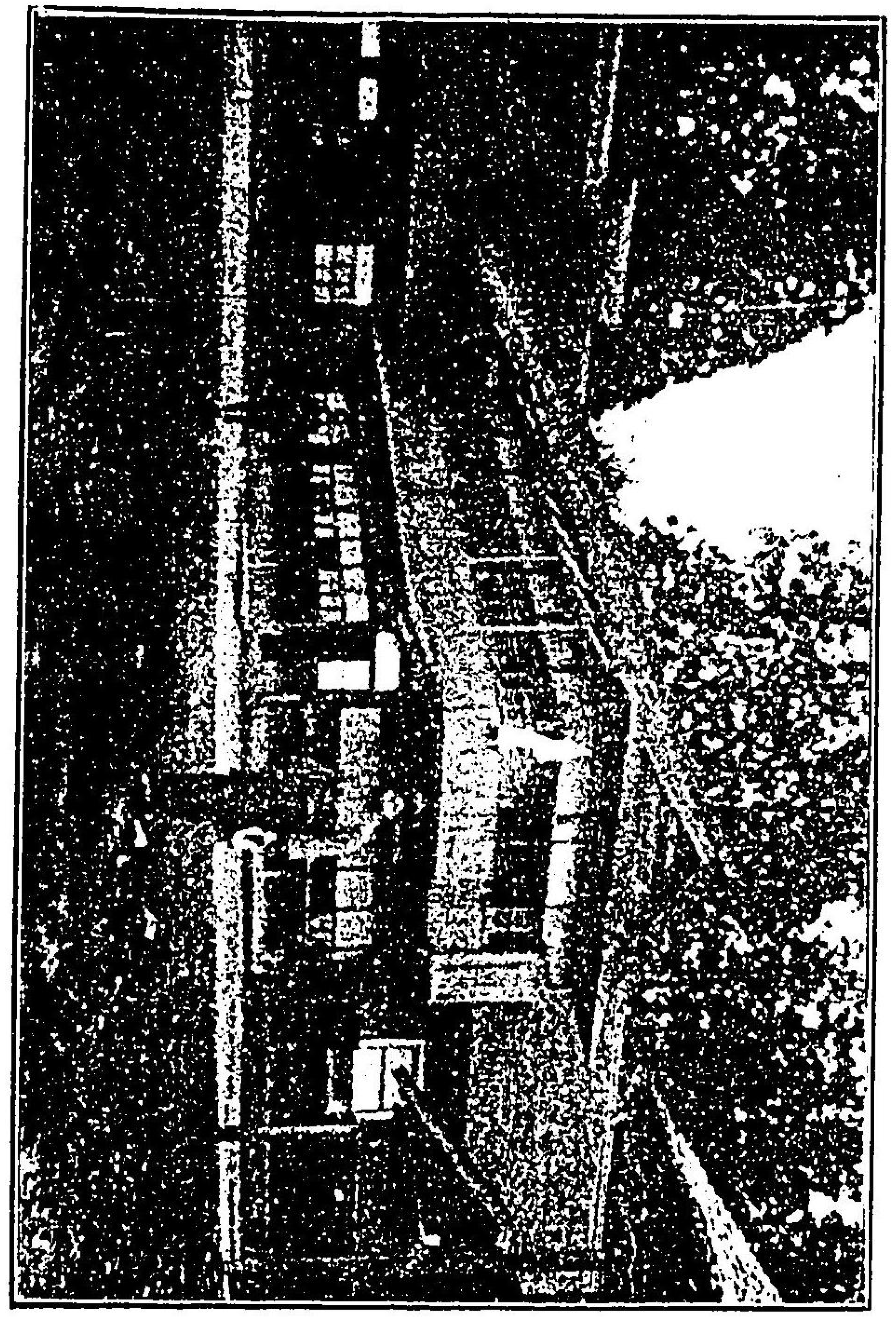
五十嵐家は直に湖水に臨み、元はこの界隈切つての盛んな旅館であつたのが、若松郡山間の鐵道が設けられてから、此の街道の人通りも稀になり、山潟戸の口通ひの汽船も不用となり、所謂文明の利器に壓せられて、今では、旅館としては僅に殘骸を保つに過ぎないやうだ。が、舊家と見えて木立も古り、調度も古雅で家族も上品だ。殊に若い嫁君なるものは行儀正しい美人だ。少佐が心づくしの彼の松が枝は名譽の月桂冠として早速この嫁君の上に落ちた。家族的の待遇と有合せの料理に滿足して、吾等は飯後直に眠に入つた。夢魂淸く盤峯の雲と通ふ。

猪苗代湖

遊猪湖

平屋松亭

松崖沙浦送還迎。萬頃玻璃徹底淸。
莫是神仙遊息處。烟波洗出小蓬瀛。



戸の口旅館と松が枝の佳人

廿八日、遊り勝な空もよひのやう〱晴れ上つた午前の九時頃、宿の周旋に係る板子舟は用意が出來た。猪苗代湖の風光を探らん爲の註文である。驚いたりな、船頭の風采！美髯長く胸邊に垂れて、薩摩鐵砲に猿袴、楫腕ぐつて湖畔に立てるさま、さながら太古の神のやうだ、觸れば罰も當りさう。「早く船サ乘らづしやい」と一喝。二人は畏まつて命のまゝに腰かけた。水は綠玉の色に澄んで錦鱗歷々數へる事が出來る。太古の神は不取敢舟を右岸篠山の根に漕ぎ寄せて、丘上からの眺望を吾々に勸めた。成程佳い景色だ。周圍十三里の大湖は、四面翠巒に繞られて、長汀曲浦、砂白く岩崎ち、遙に白帆の點ずるは濱路餉澤の邊りか。北の方盤梯山は恰も洗禮を受けて甦つたやうに、猜鉢高く天閤に入つて、緣懷き翁島は、一葦帶水の名倉山と其翠色を爭うて居る。實に絕景だ。暫く恍惚と眺めて居ると水風がそよ〱と吹いて來る、樹々の綠葉が白く閃いて搖ぐ、少佐も余も何時の間にか肘に頭を付けて居た。下は柔かい芝生だ。靑草の薰が鼻を衝く、プンと一

しほ佳い香がする。頭を回らすと白い野茨の花が二三間離れて咲き亂れて居る。美神の溫き懷に抱かれて、心氣陶然二人は端なく草を枕に眠込んで了つた。旅の疲も手傳うたのだらう……枕頭ガサコソと云ふ音にフト眼を覺ますと、太古の神が相手なしの無聊さに會津日報を讀んで居た。オー新聞を讀む、彼は畢竟太古の神ではない。少佐も目覺めた。吁この幽僻の風光！吾等は實に長安名利の夢を洗ひ盡したやうな心地して、まことに去るに忍びなかつたが、もう午だ。そこで盡きぬ名殘を留めて歸宿した。午後まだ二時間の餘裕がある、少佐は太公望を學ぶべく、船頭に命じて竿綸の心配をさせた。綠陰深き處、腰掛に跨り、餌箱を右に魚籠を左にまではよかつたが、肝心の御客樣は一尾も寄つて來ない、偶々寄つて來ても魚公皆鎖國主義を守つて毛色の異つた人の前には相警めて口を噤んで居る。二時間の垂綸遂に片鱗も得捕らなかつたのは、少佐近頃の大失敗「萬事無心一釣竿、三公不換此江山」の妙趣も無かつたらしい。出發の時間が來た、そこで湖畔遊樂の大切として少佐は旅館を背景に松が枝の嫁君をヒーローインにして寫眞を取つた。オット其處には我太古の神も加はつて居た。

長濱の絕景

みめぐみの波もかゝれり釣の絲の

長濱あさるあまの小舟に　　嘉則

二時出發、今度は途を本道に取つて又た翁島停車場に向つた。戶の口堰の流水石に激し、琴音響く十六橋の畔りに鐵柵を廻らして一株の翠松が植ゑてある。故熾仁親王殿下御手植の松と拜見された。戶の口村より迂回してだら〳〵山を登つて行くと、丘上に洋式の壯麗な館が蜃氣樓のやうに聳ゑて居る。これは有栖川宮殿下長濱の御別邸で、明治四十年風光絕佳の廉を以てこゝに之を建てられたものである。地は東南に面して、湖上の風光を一眸の下に集め、南方奈須布引の連山を

長濱より磐梯山を望む

望み、遠く駒嶽、燧嶽などの高山が雲烟の間に隱見れる。左を顧れば小平潟の一帶湖中に突き出でゝ、砂白く松青く、ミューズの神の天降つて、五色の裳をふり靡けたる如く、又川桁山吾妻山に連つて磐梯山巍然北方に偉人の如く立つて居るさま、壯の絕、美の絕、唯見るべくして心己に思ふべからず、況んやこれを狀するをや。小阪を下ると長濱村である。前面水淺く、清波岸を洗ひ、萬頃の湖光嶽色と相映じ。美しい漁村だ。昔俳聖芭蕉この地に遊んで

鶯の聲よこたふや水の上

と吟じた逸話がある。後の小山に盤上玉を轉ばすやうな鶯の一聲が、餘韻遠く水上に消れ行くところでも讀んだものだろう。今は石に刻まれてこの村の磯部に立てゝある、磐澤西久保のあたり新樹の村は綠より碧を描いて、赤き五月鯉、白き矢幡が遠近にそよいで居た、いつれ男兒を誇る家のしるしと見れる。午の頃より少し怪しかつた空もやう

ます〳〵怪しくなつて來ていつの間にか盤梯山は白雲に埋められて、僅に麓を殘し、たゞ〳〵に隱見ゆる、吁心づくしの空だなあ。櫻川に著いた頃とう〳〵雨にあつた。猥然たる雨になつた。少佐は用意の瑞典式雨合羽に身を固め、余は村松で間に合せに買つた桐油紙の大きいのを、頭からスツポリ冠つて、雨中をスゴ〳〵翁島停車場に著き、四時四十分發の汽車で若松停車場に下車した。今宵の根城は東山温泉と定めてあるが、繪葉書と足袋を買ふ爲め市街に入つた、但し足袋は少佐ので五六軒足袋屋をあさつたが、十三文甲高は何の店でも御合惡さまであつた。

東山の第一夜

東山は若松より一里許り、一度歇んだ雨が又降つて來た、車で雨中を驅け拔けて「向ひ瀧」といふに投宿した。東山第一流の旅館とのことだが、夜雨の中とて四圍の風光もよく見れない。何は扨をき吾等は

直に入浴を試みた。瀟洒たる湯殿に無臭透明玉のやうな溫湯か漫々と湛ゑて、驪山宮もかくやと心地よく覺ゑた。浴。飯、而して眠つた。夜具丈は特等一泊貳圓五拾錢分の價値はあつた。

此家は割烹兼業の旅館とて、前夜も一間隔てた大廣間に、五六人の田紳が彈けや踊れやの大浮かれ、鄭衞淫哇の聲耳邊に響いて夜半幾度か夢を破られた。翌二十九日の朝七時、溢々起き上ると天氣も溢々して又降りになりさうだ。旅には雨降と安眠妨害は大禁物だのに。寢惚姿に楊枝啣へて先づ朝湯にと飛び込んだ。無量の清快に神骨玉と化するかと疑はれた。浴後欄に凭つて眺めると、翠碧の前巒落ちて樓廂を壓せんとし、湯川の奔湍石に激して、錚々の響をなして居る。

白虎隊の墳墓

飯終り、八時東山より俥を驅つて瀧澤街道に入り、半里程行きて右に折れ、飯盛山の中腹、とある丘上に登ると。櫻樹松樹鬱々滿丘を蔽

ひ、會津の平野を隔てゝ四面の翠巒一眸の中に集まる展望の好い處に出た。白虎隊殉難の地は即ち此處である。地は石垣に廻られ、左右の石門には「精忠貫日月」と「勁節凌風霜」の十文字が大きく鮮に刻んである。中の正面に故松平容保公の篆額で、故山川中將の撰文に係る、高さ八九尺の碑が立つてゐる。其左方に整然と列んだ十九基の石碑は實に白虎隊十九勇士が、無限の恨を呑んで、英魂長へに眠つて居る墳墓である。風雨四十年苔むす碑面には十九人の氏名と年齡と特に其右上方に「自刄」の二字が刻記されてゐる。其外

いく人の涙は石にそゝぐとも
　　その名は世々に朽じとぞおもふ　　源　容保

くもりなき月日は照らせ國のため
　　さらしゝ屍くちはつるとも　　山川　浩

と云ふ弔歌も石に彫つて立てゝある。勝てば官軍負けては賊の名を

白虎隊自刄の圖

負はされて、四方より狩り立てらるゝ怒猪（いかりゐ）の牙を咬んで、敗殘の十九少年がこゝに故城を望みつゝ、哀れな最後を遂げたかと思へば、覺えず暗涙が催ほされる。

戊辰の際、會津藩は軍制を改革して、青龍、白虎、朱雀、玄武の四隊に分ち、老人組の玄武隊は專ら城中の防禦に當り、朱雀、青龍の壯輩は出でゝ四疆を拒いだ。中にも白虎隊は年十五より十七までの少年を撰んで編成され、日向內記、原克吉等指揮の下に、常に遊擊軍となつて、朱雀、青龍の活動を助けて居た。大手門の第一戰を手始に、第二第三の合戰孰れも寄手の官軍はアベコベに擊たれて、止むなく玆に持久策を執り、十重二十重に城を包圍して、自ら降服するを待つて居た。

悼白虎隊　源　容保

千代までと育てし親の心さへ
おしはかられてぬるゝ袖かな

同　山川　浩

われと我劔のしもと消えてこそ
きえぬ光を世にはなちけれ

白虎隊の最後

あはれなりたゝさきかけて死ねよとの
おしへ守りしをさな心は　原田對馬

八月二十一日、石莚の守失はれて、西軍長驅鶴ヶ城を衝かんとし、勢猖獗を極めた。會津兵之を戸の口原に邀へ擊ち、白虎隊も其の中に加はつたのである。二十三日の曉は霧深く立ちこめ、やがて小雨となり、果ては瀉ぐが如き猛雨となつて來た。白虎の面々は、各々劍を拔き藪中に隱れ、息を殺して敵の到るを待つて居る。敵は之を知つて、大砲小砲雨の如くに亂射した。東軍大敗、流るゝ血汐は大地を染め、死屍積んで山をなした。勝に乘じた敵兵は潮の如く揉みに揉んで逼つて來る。白虎隊は急遽城中に入らんとしたが、路嶮にして進むを得ず、徨うて遂に大澤の中に陷つた。糧盡き力盡き總勢亦二十人に打ちなされ、主將内記等さへ已に走つて影も見ゐない。せめて一期の思ひ

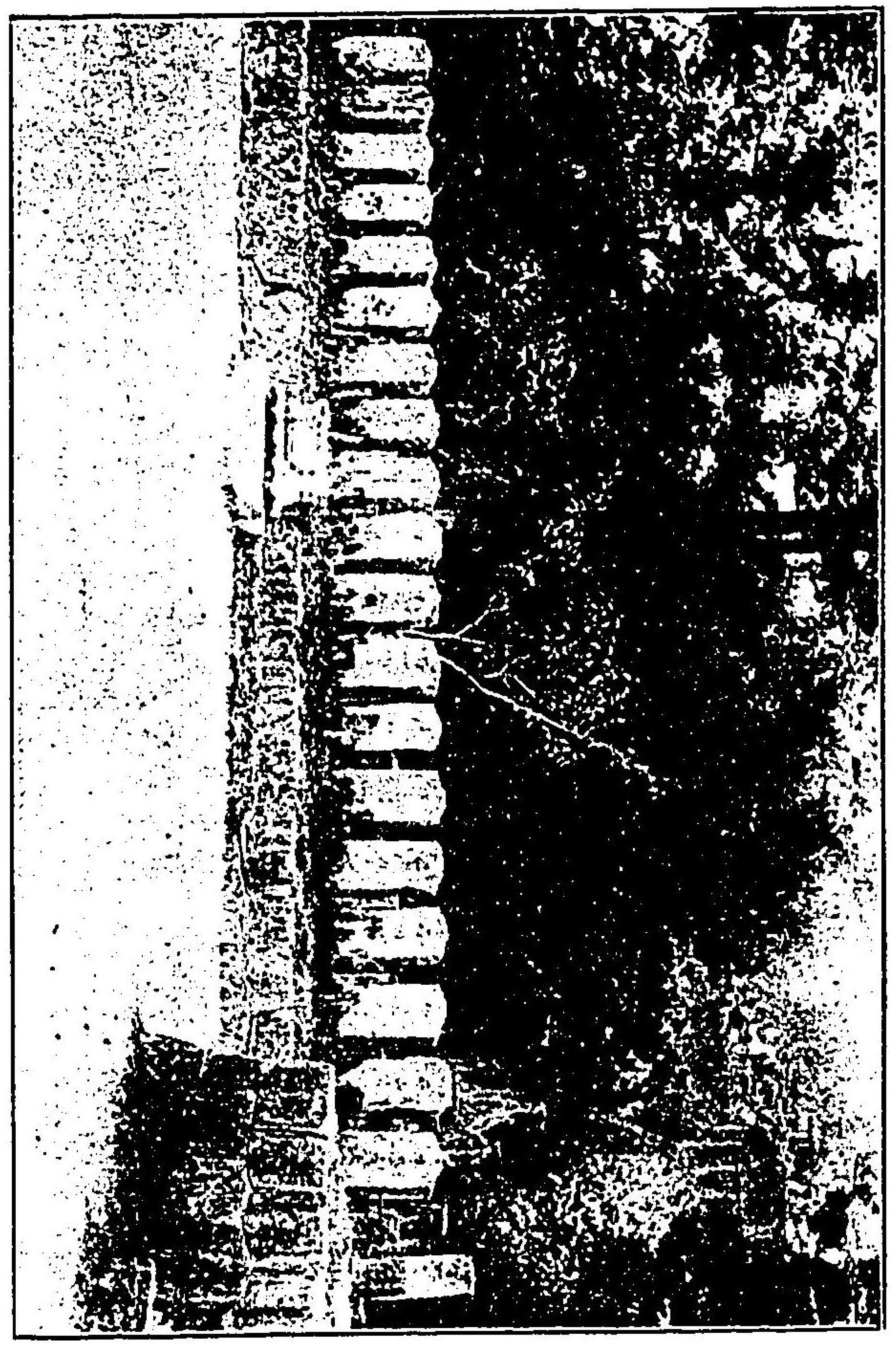
出に稲麻竹葦の此重圍を破つて、君父と共に故山の土とならばやと、滴る血汐に袖を絞り、飢と疲を堪ゐ忍び、折れたる刀を杖つき、喘ぎ〴〵て飯盛山の頂に上つた。この時已に西軍の一部は本道の兵を尾撃して城下に達し砲聲天地に轟き、若松の滿都は修羅の巷と化した。忽ち鶴が城の一角より黑煙濛々と立ち上る。「吁主君の馬前で潔く死を決せんと此處まで來たものを。萬事休矣。主君をはじめ父上母上これが今生の御暇乞で御座る」と故城を伏拜んで涙潛々と下つた。又敵の來る樣子捕はれて恥なかきそと互に相顧み腹を搔き咽を貫いて、まだ咲き初めぬ稚櫻、あはれ飯盛山上の朝嵐に散つて了つた。

少年團結白虎隊。國難豈辭乘障塞。
黃塵蔽天白日昏。警報交到四疆內。
忽捲風雨大軍來。砲丸如霰積成堆。
白虎一隊健於虎。殺傷過當何壯哉。
衆寡不敵戰且卻。身裏創痍口啣藥。

腹背皆敵將安之。杖劍暫息天女峠。
南瞰鶴城煙焰颺。痛哭呑涕且彷徨。
宗社亡矣吾事畢。君恩只應一死償。
十有九人心肝鐵。意氣從容同殉節。
泰山可摧海可翻。白虎之名竟不滅。
俯仰此事十七年。畫之文之世稍傳。
忠烈赫々如前日。眇視田橫麾下賢。

此の詩は佐原盛純氏の作で、余は常に愛吟して白虎の壯烈を偲んで居たが、今親しくこの境に來つて此詩を誦すると、髣髴として其の當時に遭遇するやうな心地がした。

吁白虎隊の自刄は實に封建時代の最後の光彩で、殺伐な維新の戰史を飾る可憐の花ではないか。



白虎隊の墳墓

殘花一輪

千代までと育てし親のこゝろさへ
　　おしはかられてぬるゝ袖かな

源　容　保

飯盛山で此の悲劇の演ぜられた翌くる日とか、印出某と云ふ老女が、愛兒の存亡を懸念しながら、野山をあさりあさつて偶々飯盛山に上つて見ると、白虎の少年隊がこゝかしこと碧血に染んで仆れて居る。ヤレ自分の愛兒もこの中に在るに相違ないと、一々屍を檢べて見たが、搜す當の愛兒は居らず、唯一人の少年、齡我兒と相若けるものが氣息奄々幽に玉の緒をつないで居るのを見た。老女もいとしさ不憫さに、抱き上げて附近の山小屋に連れ込み、それより熱心介抱の効あつて遂に瘡痍も全癒した、當時の委しい顛末が分つたのは皆其の少年の口から出たのだそうだ。之が當年の二十勇士の一人で飯沼貞雄氏其の人である。彼は今尚活らへて札幌に余命を保つて居るさうだ。「可

憐半死白頭翁。伊昔紅顏美少年。」昨年もこの北邙の地を訪うて、懷舊の涙を友の墓前に灑いだそうだが、「山上唯聽松柏聲、」で嘸かし無量の感慨があつたらう。

丘上の一端には會津の碩儒故安部井、高津兩先生の高德を勒した雙德碑をはじめ、西山翁の頌德碑、丸山少尉の紀念碑、太夫櫻の面影碑等處せまきまで列び居れど、忠烈赫々の白虎隊の碑に對しては、實に月前の燈ほども光らない。願はくば特に白虎隊と因緣なき此等の碑なとは何處か他の寺境か社地の内にでも立てた方が、立てられる主人公の爲だらうにと余は思ふた。

丘角を一轉して、坂の下にある宇賀神社には、殉難十九少年と菅野權兵衛の勇裝淋漓たる木像が安置してあつて、當年奮鬪のさまが偲ばれる。其の東方に當つて三層六稜高さ五丈許の高塔がある。内部はうねくゝ旋回して昇降され、其の狀恰も蠑螺の殼中に似たところから、之を蠑螺堂と名づけて居る。元は本尊阿彌陀佛三十三所觀音の木像を

飯盛山懷古　　淺岡一

君不見會北有山尤雄大
又不見山下有湖水漫々
秀麗如此好山水
呼稱白虎少年冢
回頭早已四十年
轉鼓堂々雷霆地
白虎當時在君側
相率出城無後先
突擊勇往不顧身
衆寡難奈殆將盡
城中猶有君父在
退來飯盛望南方
砲火破曉迸電光
君臣累代墳墓土
闔郷命運不難識
思君思親恨不禁
飯盛之山草樹中
時是八月念三日
余來弔之歲丁未
天女祠畔殉難碑
磐岳猪湖應悵悒
墓門精忠貫日月
巍々衝天立雲外
潤光清冽夏猶寒
涵養神洲壯烈士
名聲赫灼照青史
西軍霧集會山川
旌旗縱橫雲掩天
慷慨夙期答君恩
奮進激敵戰湖北
幾多貂錦委戰塵
摧殘纔算十九人
生死不敢戰且退
大軍殺到城腹背
烟焰忽掠乾坤飈
一朝化去修羅場
生死存亡迫頃刻
環坐伏劍表胸臆
可惜烈士伴秋風
殘月入雲雨空濛
慰藉英靈也自慰
振作日本國士氣
白虎有光々殊丕
故肥州公實題之

安置して老媼老翁に敬仰の掌を合させたものであつたのを、今は皇朝二十四孝の繪額が掲げられて、未來極樂主義と現在忠孝主義と代つた、時代思潮の要求からとでも云はうか。

山麓の路傍に嚴島神社と云ふ古い宮居がある。昔村民某が神の靈現によつてこの宮居を建てる時に、一童女が赤飯を器物に盛り牛に負はせて來て大工人夫どもに與へた。大工人夫どもはいくら食うとも盡きない。滿腹の後、童女牛を曳いて南に去つたきり姿が見ゑない。村民等は奇異の思ひで、其の地を封して「牛墓」と稱し、山を「飯盛（いいもり）」と云うた。飯盛山の名はこんな妙な話から出たのださうだ。

若松市

懷古　　　　盤溪

襟帶湖山鎭奥州。白河北去路悠々。
一輪背炙嶺頭月。照盡廢興今古秋。

俥は再び走り出して若松の市中に入つた。市は街路は相應に廣いが餘り大厦高樓を見ず、木羽葺、藁茅葺の矮屋がキジ〳〵列んで居る處などは決して壯麗な都とは云はれない。町民の多くは猿袴を穿いて「あの異人は何處サ行くダッペイ」とが鳴る處などは決して優美な俗とは見ゑない。されど蘆名氏以來養ひ來つた尙武の風が、鶴ヶ城址の嵐、飯盛山上の雲と通うてか、市民は慓悍不屈の風があつて、白眼に「將來を見よ」と云つたやうな意氣を示して居るやうに思はれた。

市は東に瀧澤の峠を負ひ、東南は烏帽子（ゑぼし）、背炙（せあぶり）の連山を受け、西北は平野につゞきて稻田菜圃相開け、湯川は汪洋と其の中央を貫き、山河襟帶の有樣、いかにも天然の要害天府の良士と知られた。されば昔は奥羽の藩鎭として江戸以北比するものなき大都會で、蒲生上杉の全盛時代は知らず、降つて寛永年中の調査にても街坊二百八口六萬を下らなかつたさうだ。先づ市中を郭内郭外に分ち、郭外には民家商店櫛比し、郭内は士分の邸宅軒を連ね、其の郭の内外を別つに壘滯を築き四

方十六門を開いて內外相通じ、街衢端麗であつたが、戊辰の戰十數日の兵燹に郭の內外悉く烏有に歸し了つた。後に至り郭外の一部稍々舊態に復したが、領主去り藩士四方に散じて、城內草茫々、城外亦荒寥を極め、三日見ぬ間の櫻花一夜の雨に土と化しては又しても何の香ぞ。昔東奥に覇を唱へた面影今に見るを得ざるは千古の遺憾である。

俥を迂回させて若松目貫（めぬき）の町々を瞥見し、レルと少佐と余は若松隨一の產物漆器を見るべく、七の町に老舗（しにせ）の聞れある白木屋へと赴いた。階上階下に漆器を陳列して、こゝは所謂私立漆器陳列館とも云ふべき處だ。新潟の漆器を知れるものには若松のはさして驚く價値はない。粗製濫造の點などは兩者よく似て居る。唯一つ感じたのは、此地が頗る進步主義を取つて舊習に甘んじないと云ふ點である。先には工業徒弟學校を起して漆器業者の徒弟を養成し、又縣立工業學校を設立して飽くまで世界的發展を計つて居る。されば近來其進步も著しく、製造戶數三百六十、職工九百人、年產額四十萬圓に上り、若松は實に

漆器業の若松の如き槪がある。岩越鐵道貫通の曉には新潟と若松の漆器は頗る面白い競爭を見るであらう。少佐と余はそれ〲數箇を購ひ、最後に文字を漆泥にて書いた盃を取り替して旅行紀念とした。時既に午。乃ち若松第一流の割烹店と聞これた清龜樓と云ふに上り、これでも第一流かと怪まれた座敷と給仕女と料理で午食をすまし、やがて二人は鶴ヶ城址へと俥を急がせた。

若松城

若松城懷古　東海散史

國亡家破廿餘年。書劍飄零猶自憐。
宮裏無人春草亂。殘陽空照舊山川。

盛者必衰は浮世の習ひ、沙羅双樹の花の色も落ちては又何の香があらう。一時は奧羽の重鎭として威を八方に振ひ、雄名を天下に轟かせ

た鶴ヶ城も戊辰の嵐にさいなまれて、壁落ち柱砕け隍渠も亦埋められて、廢殘の牙城は市の一隅に風打雨淋僅に其の面影を留めて居たが、之も數年の後取崩され、跡は斷礎累々、つはものどもの夢の跡に夏艸蓬々と生ひ茂り、老檜長杉は颯々の響を立てゝ空しく亡國の恨を鳴らして居る。昔城外家老輩の屋敷跡は多くは桑田麥隴と變じ、三の丸は若松聯隊の練兵場となり、西出丸は會津中學の運動場と化してゐる。而して本丸は公園をしつらふべく、此頃櫻樹を植ゑ丘池を築き專ら修飾に力を盡せるため多少面目を改めて來たが、春の花に秋の月に太守が酒肉管絃の樂塲や、壯觀なりし武庫米倉のありしところ〴〵、今は尋ねん由もなく亂烱空しく徨うて唯哀鳥の啼くあるのみである。

　車夫の導くまゝ天守臺の跡に上つて眸を四方に放ちつゝ、余はレルヒ少佐に知れる處、聞ける處を隈なく説明した。此處は四面險山に圍まれて沃野千里其の中央に擴がり、美なる哉山河の固めと、古來英雄の心事を勞したも無理ならぬことゝ思はれた。士族の子とか云ふ車夫

戰後の鶴ヶ城天主閣

の一人は、眉を上げ手を揮つて滔々と其の當時の形勢を指點し、縷せ、彼方の白河口よりは官軍の將伊地知正治等薩、長、土、肥、筑、尾諸藩の兵八千を率ゐて攻め來り、此方の越後口よりは、同じく薩、長、土、因、加、藝諸藩の兵一萬山縣狂介に指揮されて進んで來たと。石筵の苦戰より城中の慘狀まで說き去り說き來つて、恰も其の時其境に在るが如く感ぜしめた。レルヒ少佐もこの古城に來つてこの實話に接し、頗る感興を催ほしたらしく、大砲小砲の如く質問を連發して、余の說明の一言半句も洩らさじと、片唾を呑んで傾聽して居た。

戊辰の戰

鳥羽伏見の敗殘は德川家を全く衰亡の淵に沈め、天下の大權を弄したる慶喜公も時なる哉、遂に大總督の錦旗の前に叩頭罪を謝するに至つた。官軍旣に江戶城を收め慶喜公は水戶に退隱し、德川氏の處分玆に一段落を告げたれど、麾下の士には之を憤慨し、形勢の非なるを知

れど、桀狗堯に吠へて猶王師に抵抗せんとする者が少なくない。中にも海軍副總裁榎本武揚は品川なる幕府の軍艦を率ゐて館山に走り、歩兵奉行大鳥圭介は部下千六百人を率ゐて市川に走り、散兵頭福田道直は千五百人を率ゐて木更津に走り、近藤勇は新選組の兵を以て下總に屯す。殊に東叡山の彰義隊は勢ひ猖獗を極めて滿都の膽を寒からしめた。

近藤、福田等先づ破られ、榎本は北海に走り、圭介奉行亦敗れて日光に走り、上野輪王寺宮と共に會津の軍中に投じた。さなきだに頑强激烈なる會津藩はこの亡命の客を加へて勢茲に決心の臍を固めて飽くまで官軍を邀へざるを得なくなつた。殺氣東北の野に滿ち、決死の貔貅は皆腕を扼し齒をギリつかせて、恐るべき風雲は將に會津の天を掩はんとして居る。

勢虎狼の如き官軍は、越後口と白河口の兩道より進んで、この頑敵を陥れようとした。白河は奥州の咽喉であつて、四通八達の要地なる

故兩軍死力を盡して戰つてゐる。長岡は越後各藩中の最も屈強なるもので屢々官軍を惱ませたが、五月青葉の節に入つて兩道の軍、一は白河口を破り、一は長岡城を陥れた。旣にこの二城を取れば、兩道の軍直に會津に向つて進むことを得べきも、一方には磐城平、及棚倉の兩藩、白河の後面を睨み、一方には長岡の敗兵會津、米澤の兵と氣脈を通じて、長岡城の隙を窺つて居る。官軍奮躍。白河の勢は先づ棚倉と磐城平を攻めて七月之を平げ、一方越後に於ては激徒不意に起つて長岡城を取り返し、勢ひ又振つたが參謀山縣等いつかなひるまず、再び之を奪ひ返し、折柄海路新潟に上陸した別働隊の官軍と力を協せて近隣を定め、越後は茲に全く鎭靜に歸した。

出羽の方にては莊内最も强悍を極めて日夜秋田を苦めて居たが、官軍の援助に敵しかね日ならずして近藩もろとも歸順して了つた。かくて奥羽越の三州漸次平定する中に在つて、會津仙臺の二藩屹然と官軍に反向つた。

先づ根を除くに在り

此處は峽中の別天地、秀靈の山水に哺まれて自ら强悍の氣に富める會津健兒、確に侮り難き敵よと見て取り、白河口の參謀伊地知正治、板垣退助の諸將は額を鳩めての協議「吁德川の大樹まだ東北の地に凋落せぬか。會津は實に根である、其の他は枝葉である。早く其の根を除いて枝葉を枯らさすに若くはない」と軍議一決するや、兵を分ちて一隊を仙臺に當らしめ、八月二十日大軍堂々とこの孤城に向つて進んだ。猪苗代湖口の守脆くも破られて二十三日官軍城下に逼つた。會津兵の靑龍、朱雀の奮鬪は云ふもおろか、白髮の玄武隊、紅顏の白虎隊、花耻かしき紅裙隊の目覺ましき活動は實にこの時にあつたのだ。既にして越後口の山縣軍は津川の難關を打ち破つて城下に達し、兩道の軍こゝに合して勢ひ破竹の如く犇々と攻め寄せた。あはれ鶴ヶ城は十重二十重に圍まれて硝烟天を掩ひ、伏屍累々紅の血大地に漲つた。この

時米澤は既に歸順し、仙臺南部亦降伏の意ありと聞こえた爲、玆に全く望を絕ちて、死守三旬、九月二十三日の朝藩主容保公出でゝ降り、首謀の重臣皆自らの刄に伏して亂世の犧牲となつた。爾來風雨四十餘年、尙ほ「魂魄結兮天沈々。鬼神聚兮雲冪々」の感がある。

若松城略史

過若松城　　　　杉　聽雨

城壘既荒秋草深。　圍濠老樹尙林々。
當時順逆今休問。　獨感三旬死守心。

會津藩の壯烈を謳ふものは又其の城池の構造と歷史に一瞥を與ふるの價があると思ふであらう。鶴ヶ城は又黑川城とも稱へられ、昔後小松院の至德元年に蘆名直盛初めて之を築き、後年蒲生氏鄕大に之に改良を加へ、爾來代々の領主修補增築して、本丸二の丸三の丸北出丸西

出丸二重樓其他の諸門等輪奐の壯驚く許り、天主は本丸の中央に高く聳ゐて蒲生時代には七重樓であたつのを加藤氏に至つて五重とした。名護屋の秀吉の建てたものに擬して作つたのだそうで、四圍の高き堅壘の上には白き七壁を廻らし、碧水塹溝に漲り、古檜老杉城中到る處に鬱蒼と聳ゐて居た。

四面の大山脈は天然の城郭となり、河水縈廻、土地の形勝甚だよろしく、一度この地に據らば、克く他を制するを得ると見て取り、初め武門の起つた時に、賴朝の重臣佐原氏來り治して奥羽の咽喉を扼した。伊達相馬は申すに及ばず、奥州奉行の葛西氏さへ密に怖を抱いて居た。後孫蘆名盛氏の中興より武威益々八方に振うて實に東北の偉觀であつた。

されど月盈つれば缺くで、英主盛氏死して後は長臣等互に其權力を爭ひ、內訌の絕ゆる暇がなかつた。この隙に乘じて怪傑伊達政宗之を攻め取り、十數代治め來つた本領は勿論盛氏が經營慘憺して略取した

四隣の地一朝にして失つて了つた。秀吉政宗の封を奪ひ天下に號令する時になつて、自ら會津に來り形勢の固よと許りに重臣中より蒲生氏鄉を拔いて此處に封じた。當時會津の勢力の殷盛は實に想像せられる、上杉加藤兩家相尋いで此に治し降つて保科氏以來領地は少かつたが、尚二十萬石を領し、殊に德川家の親藩と云ふので亦侮るべからざる勢であつた。文久年中藩侯松平容保公擢んでゝ京都守護職となり、陸軍總裁となつて大に國事に效した爲、會津は蒲生氏の昔の如く益々盛大を來し、天下の安危かゝつてこの一藩に在りと云はれた位の勢であつた。一朝其の就く所を失つて順逆地を易へ、明治戊辰の際には、數萬の官兵に圍まれて、砲煙簇り彈雨飛んで忽ち修羅の巷と化し、天守樓櫓堞壁等白堊は點々彈丸の跡隙間なく、柱折れ軒挫け、惡戰苦鬪の名殘を留めてもの凄く市の一隅に立つて居たが、明治九年に至り陸軍省は天主城門其他の造營を取潰して唯斷礎纔塹を餘す計り。今や荒廢見るに忍びざれど其の規模の宏壯なる、其の築城法の巧なる、流石は日

鶴ヶ城追手門桝址

本三名城の一と數へらるゝに足る事と感に堪へなかつた。明治二十年官之を拂ひ下げて昨年物故された子爵松平容大公に與へたさうだ。

娘子軍　その一

鶴ヶ城陷落に際して、老若擧げて苦戰したるうちにも花顏雲髮の娘子軍の一隊が、健げにも薙刀を閃かして簇がる敵陣へ斬つて入り、會津戰爭最後の悲劇を演じた事、並に隊長赤岡阿竹の事を調べて見やう。

由來我國は天地秀靈の氣の萃まる所で、この氣發しては萬朶の櫻となり、凝つては百錬の鉄となる。一旦緩急の起つた時には、泰山の義を重んじて鴻毛の死を輕んじ、潔く君國の犧牲となるもの、孤り有髯の男子に限らず、かよわき粉黛の女流にも古來其の人に乏しくない。所謂大和魂は日本男女の共通性だ。近くは會津役に於ける殉難娘子軍の如きは確に其の一例である。飯盛山上の若葉に袖を沾ほすものは、又此の可憐なる花の最後に一掬の涙を惜まぬであらう。今久保天隨氏

過若松城　大庭松齋

夕陽下馬倚長風。風景不殊感不窮。
擧目山河非復昔。寒烟衰草滿城中。

同　隆衛

たれもまたすきし昔をしのぶらん
鶴ヶ大城になくほとゝきす

に聞いたところを概錄して見やうか。

會津藩士赤岡大介の女に阿竹と云ふ芳紀正に二十蛾眉豐頰花を欺く美人があつた。幼より史書に涉り、深く吳の孫夫人の人となりを慕ひ、又一方には武士の娘のたしなみ薙刀の術にも頗る長けて居たさうだ。戊辰の正月伏見の戰に會桑二藩の兵大に敗れ、容保公は慶喜前將軍を奉じて江戶に走り、尋いで會津に歸り、直に檄を飛ばして東北の諸藩を連衡し、兵を修め城を固うして屹然と官軍に反抗した。官軍方にては伊地知正治板垣退助等の軍勢八千白河口より進み、山縣狂介、黑田了介等一萬の大兵を率ゐて越後口より來り、行々四邊を靡かせて城下に肉薄し、十重二十重に城を圍んだ。鶴ヶ城今や壯兵多くは外に死し、內は男女老幼合せて五百八、孤城落日思へば哀れな境遇となつた。この時阿竹は女ながらも默視すべき秋でないと、藩老梶原平馬に見へて、

「事のかく相なり候上は蟷螂の斧に當るより早く朝廷に歸順して

祖先の社稷を全うなされ候ては」

と大義名分のある所をまめやかに述べたところ、女だてらに出過ぎた事と鼻のあしらひ、

「成敗は天命で戰の罪ではない。若し愈々國の亡びた曉には、吾輩は社稷と運命を共にしやう。御身はまだ御年若、御容色はよし、今の藩主亡び給ひて新らしき主君の乘り込んだ其時は、よろしく閨房の寵を專らにして末永く御樂みめされ」

と嘲つた。阿竹はこれを聞き、柳眉を逆立てゝ無念の涙をコボした。先に父に說いたことがあつたが聽かれず、今又藩老に說いて却つて辱めらる。吁時なる哉と馳せ歸つて、其妹阿蝶及神保阿園と相議り共に力を軍事に致さうと決心した。

「御家の滅亡も愈々旦夕に逼り候、女子たりとも亦君の御恩に與かるもの、此大事に當つて爲すこともなくおめ〳〵引込んでは居られぬ。今朝老臣に見へ利害を說いて歸順を勸め候ひしが納れられるどこ

ろか却て嘲られ申候、口惜しさは措をき一藩の運命も定まり候上は、妾は潔く冥土に主君の御伴したく存候が皆樣如何」

と涙、聲と共に下つた。同じ心の二人は欣んで殉死に同意すると、阿竹の喜び一方ならず、直に硯を取り寄せ、水莖の跡勇ましく檄を城中に飛ばして女兵を募つた、即座に四十餘人の紅裙連阿竹の下に集まつて、一期の思ひ出潔く君の馬前で討死しやうと誓ふた。時は八月二十四日である。

この時已に城は稻麻竹葦、蟻の這ひ出る隙もなく圍まれて、悲運は刻一刻と逼つて來た。と會津藩にこの人ありと云はれたる城將佐川官兵衞數百の兵を引連れて、城の西に出で薩將篠原國幹と戰ひ、相打つ事數合、官兵衞敗れて柳橋に退いた。國幹又之を衝く。官兵衞又退いて穢多坊を扼した。硝煙天を掩ひ、死屍地に滿つと云ふ有樣、之を見たる御竹は「イザ君國の爲に死するはこの時」と袂を奮つて起ち、各自に其の長き黑髮を剪りて男裝せしめ、四十餘名を分つて二隊とし、一

隊を御園に授け、自ら一隊を率ゐて、白鉢卷襷がけ手に薙刀を提げ馬を驅つて出で、部伍整然急いで穢多坊に至ると、砲煙彈雨の間を東軍危く潰亂しやうとして居る。阿竹の一隊は急遽馬を躍らして横に官軍を衝いた。官軍の參謀山縣將軍遥に之を望んで兵を收めて云ふやう。

「ソラ娘子軍が來た。妄りに發砲してはいかんぞ。女子のかよわき身を以て主君の難に殉ずるは誠に感服の至り、かゝる者を殺すは不祥だ、皆生擒にしてよくなだめよ」

と情ある命令に接して諸軍又銃を發する者はなかつた。が狂ひに狂ふた娘子軍はやがて加州藩の陣へと無二無三に斬り込んで來た。

娘子軍　その二

嫋々と露にも堪ゑぬ撫子の大和婦人が一たび決死の臍を固めては、泰山前に塞がり鴻河後に漲るともつゆ動かぬ姿勇ましく、斧に當る蟷螂と笑はゞ笑へ、死すべき時に死せざれば死するに勝る恥ありと、奮

ひ起つた娘子軍に斬り込まれて、加州兵一軍覺ゑず動搖めいた。この時隊長竹下於菟吉馬を進めて女軍の前に立ち塞がり

「や暫く〳〵、我が參謀は御身等の高義を重んじて、御身等と刄を交ふるなとの情ある命令を傳へて居らるゝ。御身等は王師の意中も察せず何故我々に敵對するか。早く刄を收めて寛大な處分に與つては何うじや」

と詢々と說き諭したが阿竹は頭を振り「御家の滅亡眼の前に在り、妾等は唯死して君の御恩を償ふ許り………」

と益々進んで來る。官軍止むを得ず鋒を交へた。女軍の素破らしい奮鬪に加州兵殆んど敗れやうとした。これを見たる薩將桐野利秋（當時中村半次郎）捕卒を指揮して斜に阿竹に逼る、阿竹は大聲疾呼、薙刀を揮つて立處に薩兵二人を斬り仆した。薩兵大に怒り刀を拔いて阿竹に斬りかゝる。利秋急に之を制し

「やい汝等何をするつもりだ、女子と戰うてたとゑ勝つとも耻だぞ。

且つ約を破り刄を交へて狂介將軍に笑はるゝな。生取れ〳〵」
と呼ばゝつた。

既にして城兵五百、娘子軍を援けて横合より官軍を襲ふた。兩軍交々亂れ、劍撃の響銃砲の音空に鳴つてもの凄く、女兵が死力を盡しての苦戰も衆寡敵せず、或は死し或は傷き、殘るもの幾人もない。阿竹は後ふり返り阿園阿蝶に云ふやう「妾等の事愈々了り候。生きて敵に辱められるよりは共に自殺して冥土に君父の來給ふを待受け候ては」

と轡を聯ねて高瀬村に赴き、將に林中に入つて自刄しやうとした處へ伏兵驟に起つて之を圍む、三女奮起して各二人を斬つた。偶々ビューと飛び來る彈丸阿竹の胸に當るよと見れば、阿竹は眞逆樣に馬より落ちて遂に敵なくなつた。阿蝶は敵兵の今にも姉の首を擧げやうとするのを見て馳けつけたが不運遂に擒にされた。之を見たる阿園も赴き援けやうとしたが官兵に阻まれ迂廻して小山田の谷間に逃れ馬を下りて將に自殺しやうとした時、捕卒已に追ひ逼つた。阿園は最早飢と疲

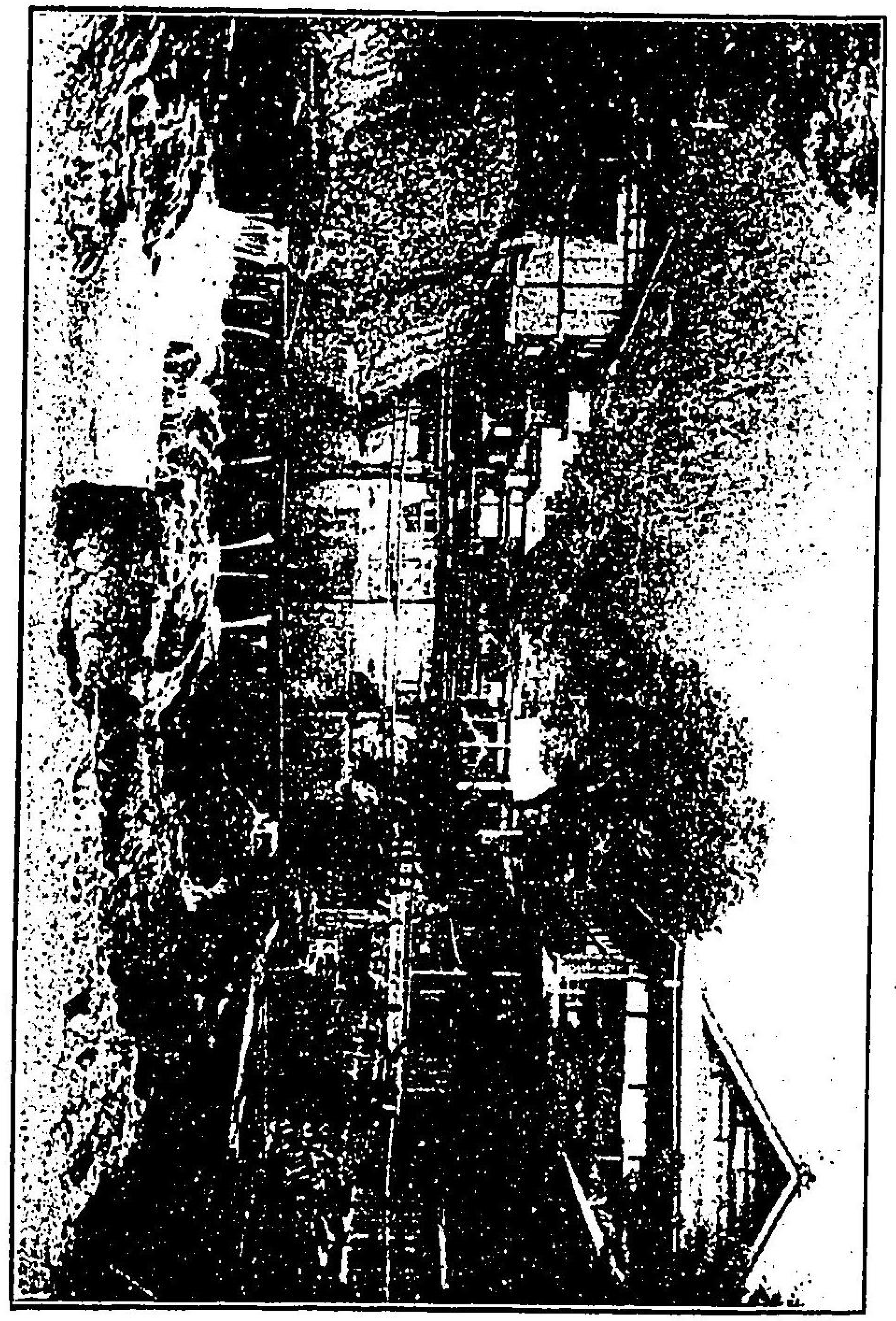
に起つ力もなく、捕卒に向つて手を合せ

「武士の御情け何卒直にこの首を刎ねて赤岡殿と共に彼の世に行なせ給はれ」と涙ながらに哀願したが捕卒は聽がばこそ、縛して拉し去らうとする。阿園大に怒り

「この情け知らず奴！」

と罵る、偶々官軍の軍監來り阿園の創あるを見て之を野戰病院へ送つたが、藥石效なく遂に花の盛りの十八才を一期として黄泉の客となつた。

吁會津の義擧、桀狗堯に吠ゆるの誹は免れざれど、本是れ忠誠の餘に出でたるもの、項氏の覇已に息むも魯城ひとり存し、蕞爾たる孤城よく天下の兵を半歳の長きに弄せしは實に壯と云ふべきである。わけて阿竹の娘子軍が、かよわき粉黛の身を以て克く倉卒の變に處し、大節山の如く、忠を其の事ふるところに盡した壯烈は、實に飯盛山の少年軍と共に千歳の下に其名を傳ふべき美談である。



東山溫泉「向ひ瀧」

午後五時暗雲盤梯山の一方よりもの凄く襲ひ來て今にも大雨を落としさうになつた、少佐と余は無量の感慨を殘して將に此處を去らうとする時暮鴉數點城頭の林を離れて飛んだ。「烏々どこさいぐ、天寧寺の湯さいぐ」いぐは行く、天寧寺の湯は東山溫泉で吾等の宿のある處だ。

愈々鶴ヶ城址を辭し、天寧寺さいぐ烏の後を逐うて、二臺の俥は城下を驀直に駈け出した。何れの町か忘れたれど車上なるレルヒ少佐は後ふり返り「彼を見よ彼を見よ」と微笑みながら前方を指す。見れば丸髷結うた一人の女、年は三十五六か筒袖の臂を突つ張り、猿袴の大脚を動かして得々と自轉車を操つて行く。それが頗る巧い。ソンジョそこらの自稱サイクリスト、あつちへ寄つたりこつちへ寄つたりの八人藝とは雲泥の差ありと見ては驚かざるを得なかつた。されど此女の蠻的ハイカラーは當時の娘子軍の武者振と共に、場合の色こそ變れ、婦人の間にも磅薄してゐる會津氣質を表はして居ると自分は面白く感

東山温泉　　柳原前光

飛泉噴雪翠微門。幽鳥有聲雲影閑。
睡臥也無煩熱夢。清風萬斛是仙寰。

同　　海上胤平

岩瀬こす波にくだけてかけ消き
湯川の川もうちけふるあり

じた。

東山の第二夜

若松の郊外田塍の間を縫ひ、湯川に沿うて上る事一時間にして俥は吾々の旅館「向ひ瀧」に著いた。時に午後六時。暮れぬ間にと二人はそれより散策を試みた。館前の橋に立てば東山の大勢眉宇の間に集まり、湯川の兩岸奇石怪岩の峙つ所に高厦層樓五六十戸立ち並び、翠樹三方を繞り西方僅かに開けて、湯川の奔湍噴沫を飛ばして馳け去る。

佐岩奇石勢如飛。忽覺寒風拂我衣。
橋上停車呼快絕。瀑泉一道噴珠璣。

と伯土方氏の歎詠されたのも蓋し此處であつたらう。

去つて湯川の右岸を溯つた。狹き一條の途を隔てゝ旅舍青樓賣店ギシ〳〵と軒を竝べ、浴客群を成し、いかゞはしき女性も其の間に頭出

頭没して居る。街勢の盡きんとするところに又一橋を見た。橋上の眺めは前のと大差なけれど幽鳥林に鳴いて白雲徐に彷ひ、樹色水光、平凡な景でない。若し肉酒の汚す毋つせば此の境直ちにこれ神仙であらうにと自分も惜んだ。

此より七町許り湯川に沿うて上ると、高さ二丈もある雨降瀧が大石の疊起して居る上を、數級の飛泉をなして落下し、氷綃を晒し玉簾を推いて壯美寶に筆紙に盡せない。其右に當つて、山の傘に似たるものは其名も唐様の傘巖にしてこれ亦東山奇景の一たるを失はない。暮色漸く深くなつた、即ち兩岸を一周して「向ひ瀧」に歸り、欄に凭つて暫し後庭を眺めた。後庭は直に山腹で奇樹異草の間に躑躅今が眞盛り、紫翠の山將に暮れんと欲してこの花獨り燃ゆ、庭脚の池には鯉魚潑溂と戯れて見ゆる。忽ち庭の一隅紫紅の間より天女が一人現はれた。粉黛鮮かに島田の髷は結ひたての露も垂れさう。わざとならぬ服裝で年は十八九、飯後の保養か、蓮歩徐ろに庭の徑を通り、砌を上つてさる

室の障子の内に隠れた。多分はこの家の抱へ妓であらう。もしこの妓の白き脛にても表はれたらんには耻を末代に殘した久米仙の一人二人は出たかも知れなかつた。

良き家づと

浴了つて午後七時膳は型の如く運ばれた。御馳走も型の如し、奇を好むは人情のつね、せめては御給仕丈でも型を易へてはと二人は協議即決した、一寸斷つて置くが御給仕は勿論文字通りの意味で。やがて現はれた御給仕は驚く勿れ、さきの天女だ。「今晩アリー」の一拶に吾々の相好も餘り崩れなかつたことも斷つて置く。酒なくビールなく唯出放題の話に涎も垂らさず無慮一時間を費やして漸く箸を收めた。茶が出た。御給仕の任務は飯と共に終る筈であつたが、蜀を望む人の情に洩れず、

出羽で莊內、最上で上の山
　　こゝは會津の東山

と謠にもしるき此の地、粹の一面より研究するも亦後學の爲と、午後九時まで御給仕の任期を延すことに決した。彼女は三味とりよせ、何か白虎隊に因みあるものと云ふ吾々の注文に應じて、次の二俗謠を紹介した。

白　虎　隊

東下りの錦を、見るもあはれな白虎隊、十六人で心あはせ、馴れし御城を眼の下に、堅い約束いひ交はし、幼な心の一筋に、杖むな引くも瀧澤の、飯盛山の名も高き、露と消ゆるは皆國の爲、君の爲、これが日本の鑑となりて、末代までも名を殘す。

又

ますら男の、名にしあひ津の白虎隊、まだ咲き初めぬ稚櫻、
飯盛山の朝あらし、思ひ殘して散る蕾。

前者は大津繪、後のは「サノサ」。嬌音玉の如く、彈き出す三弦の聲と共に餘韻遠く翠巒に入りて、山靈も舞ひ出すであらう。白虎隊の悲壯な最後、眼前に生如たるを覺わた、余は先にこの歌意を飜譯して少佐に授けた、少佐は幾度も彼の女に繰り返さしめて、傾聽轉た感慨を催ほしたらしく、「よい土產が殖へた」と大事さうに其の飜譯をノートの間に收めた。九時豫定の通り彼女は退いた。それより二人の談話は日本人のハラキリ問題に移つて、外國人のハラキリに對する感想、四十七士の論、忠孝論、日本戰勝の源因より最後に「大和魂の具體的エッセンスはこのハラキリに在り、ハラキリの眞理を知らざる以上は、未だ全く日本を知り得たとは云へぬ」などの議論も出たが、記事は他日に讓らう。

床がのべられてから二人は繪葉書をそれ〴〵友人に書いた。少佐は十五本、余は十本、就眠十一時。屋外シト〳〵と夜雨の聲がきこゑる。

鞭聲粛々

三十日愈々歸港の日取となつた。朝六時床より出でゝ東窓を開けば、まだ降り足らぬ雨空に往來の雲の脚急しく旅の前途が頗る氣遣はれた。入浴、喫飯、支度よろしくあつて吾々は又俥上の人となつた、樹色水光朝はまた一入の鮮さに、東山の風景名殘尠なからず思はれた。右顧左眄谷間の徑を通りぬけてよりは、車勢飛ぶが如く若松に入り七日町にて野澤までの馬車を賃ふた。馬車は市街を外れ一望限りなき田野の間を縫ひ、青々とした平野の中に入る、この邊一帶桑樹を植ゑ、時々姉さん冠りの二人三人と桑を摘んでるのが見へた「桑を摘め〳〵ゑ蠶さまの絹は殿御の袖となる」と唄つてるか何うかは聞ゑなかつた。唯露を帶びた綠葉の間に桑の實獨り紅く誇つて、譬へば血汐の

點々と滴らんとする様である。

昔バビロンとかに二人の若い男女があつて、隣家同志の緣深く互に思ひ思はれて居たが、女の親が頑固で其の結婚を許さなかつた。この垣一重が黒鐵のと、二人は身も細るばかり煩悶した。或日遂に二人は駈落ちと心を定めて、郊外のさる墓地の桑の樹の傍で待ち合せることにして、女が先に行つて待つて居ると、現はれて來たものは戀人でなくて一頭の獅子だ。女は膽消て逃げる拍子にヴエール（面巾）が落ちた。獅子は怒つて其ヴエールをズタ〳〵に引き裂いて行つて了つた。其の後へ件の男が來て見ると情人の姿はなくて寸斷のヴエールのみ落ち散て居る。これはテッキリ獅子に食はれて了つたに相違ないと一も二もなく呑み込んで、生甲斐もない身と自殺を遂げた。そこへ戻つて來た少女は其體を見てビックリ仰天、郎の屍に取縋り「ナゼ死んで下すつた」と無量の悲歎やる瀬なく自分も郎の跡を逐うて自害した。其時傍にあつた桑の實が血汐に染まつて赤くなつたと云ふやうな話でも

想ひ起して見ると馬鹿らしいやうだが平凡な桑にも亦一掬の詩味が浮いて來る。遂に雨がポツ〳〵落ちて來た、桑の葉は其の濃綠の掌に雨滴を受けて人を招くやうにヒラ〳〵と動いた。

この邊り風物何の矚目すべき奇もなく、馬車は坦々たる平野の間を走りゆく。坂下、塔寺は火後の慘狀見るに忍びず、ひたすら祝融氏の殘酷に心を寒うした。東松村より西に登る二十町許り一の險嶺の頂に出た。この街道第一の重阻で、東松峠とはこゝである。もしそれ雨勢の攻むる勿つせば其展望は如何に奇秀なるものあらんと惜しく思はれた。馬車は又下り初めた。雨裡の山々綠より碧を抽いて、間々藤の花のしほ〳〵と其の枝に懸れるさま、まことに心にくゝあらはれに見ゑた。

雨は益々降り募つて放眸意の如くならず、加ふるに連日長旅の後とて睡魔切りに襲ひ、余は遂に車中を蓐にグッスリ眠り込んだ……若松より九里、午後一時野澤町に著いた。一週日の前、馬車を棄てゝ山

路を山都停車場へ拔けた處はこゝである。十一鹽屋と云ふに喫飯、唯一の御馳走として供せられた鰌は蛇の子分と見做されて、一片も少佐の口には上らなかつた。

午後二時新に馬車をしつらへて野澤を出發、車峠は名の如く曲折迂回して次第に急坂となつた。先に經たる處とて景物一も我好奇心を動がすものなく、少佐亦默然。鞭聲粛々として雨中を走りゆく、鳥井峠より下つて平地につくと忽ち前壇の馬丁、ヒラリ馬車より降りて腰つき可笑しく、行く〳〵立小便を始めた。白水蛇の如く長さ數十尺に亘る、少佐は之を見て

「大層簡便な排泄法ですね、彼は時間の經濟家だ。」

と微笑しつゝシガーに火を點けた。旅情太だ寥々犖确たる石路を馬は長鞭亂打を受けて午後七時漸く津川にかけ入り。菱屋の前に止まつた、羽織袴の主人は又慇懃に歡迎してくれた。部屋の書幅も茶器も皆前日より變つたものに仕替へられて頗る心地よく感じた、

阿賀川を下る

若松より長驅十六里、雨に始まりて雨に終り、あはれ二個の旅鳥は旅路、瀟々として氣も濕めり勝ちに今日の一日を過ごした。明日は最後の旅路、殊に名に負ふ阿賀川の風光を舟の中より訪はんもくろみ、「祈らば晴れよ五月雨の空」と賤が念力天に通じてか、翌けて三十一日の空は一碧拭ふが如く、清風徐ろに吹いて、我れ人共に喜色面に溢れた。

午前八時「舟用意了んぬ、急がせ給へ」と宿の主人に促されて、二人は乃ち菱屋旅館を立ち出た。津川の清奇なる街路を西に去ること數町にして、阿賀川の岸小高き堤上に出た。其の下に吾々の乘合舟が繫がつて居る。一望快豁、滿峽の曉霧全く霽れて燦めく日光は四面の江山を射て紫翠眩く、東北の方麒麟の空に嘯くが如き山は狐戻の城址にして、室谷、揚川の二水其の山脚を廻り、合して此處に阿賀の大江となる。大龍の横はるが如き麒麟橋の下より、折柄帆船が二つ三つ上つ

狐戻城址麒麟山

て去る。實に壯美の景である。而もこの壯美の景が今を去る四十餘年の昔、龍攘ち虎闘つて殺氣山河を包んだ古戰場であつたと思ふと、洵に感慨に堪えないものがある。

頃は戊辰の七月だ。官軍保田驛より進んで、一擧赤坂の壘を陷れ、騎虎の勢石間の關を襲ふた。東軍自ら關柵を焚いてこの町に走り來り尙この阿賀の大江を阻みて五千の殘兵屹然として王師と睨み合ふた。旣にして官軍の一隊新發田赤谷より綱木峠、諏訪峠を略取してこゝに集り、兵合せて一萬、山谷に屯し林巒に據り、旌旗翩々と翠綠の中に翻つて、連日劍擊の音彈射の響に山巒も爲に崩れん許り、この地有史以來の壯觀であつたらう。已にして會津の城下は血戰幾度か、頻りに敗報が飛んで來る。東軍遂に谷澤(やざは)の營を燒き、津川驛を棄てゝ走り、官軍長驅して其後を追ふた。

今この川上に立て當年を追想すると「逝者如斯矣不舍晝外」、走つた人も追うたものも凡て過去の坑中に埋まつて、尋ぬる由もない。唯

江畔偶成　　無名氏

一天中斷大江間
帶雨殘雲掠樹還。
葉々風帆齊點白。
碧嵐浮動夕陽山。

若葉　　蕪村

たかとのゝ灯影に沈む若葉かな

汪々たる阿賀の水無限のスペースを流れて、人をして有爲轉變の人生を哀み限りなき永遠を懐はしめるのである。

促されて舟に乗つた。合客（あひきやく）十數人、其中央に荒莚一枚を敷いて吾々二人の席と定められた。帯劍帯帽の井上署長、羽織袴の宿の主人其の他二三の有志諸君に送られて、八時半吾等は舟中の人となつた。

小花地の奇景

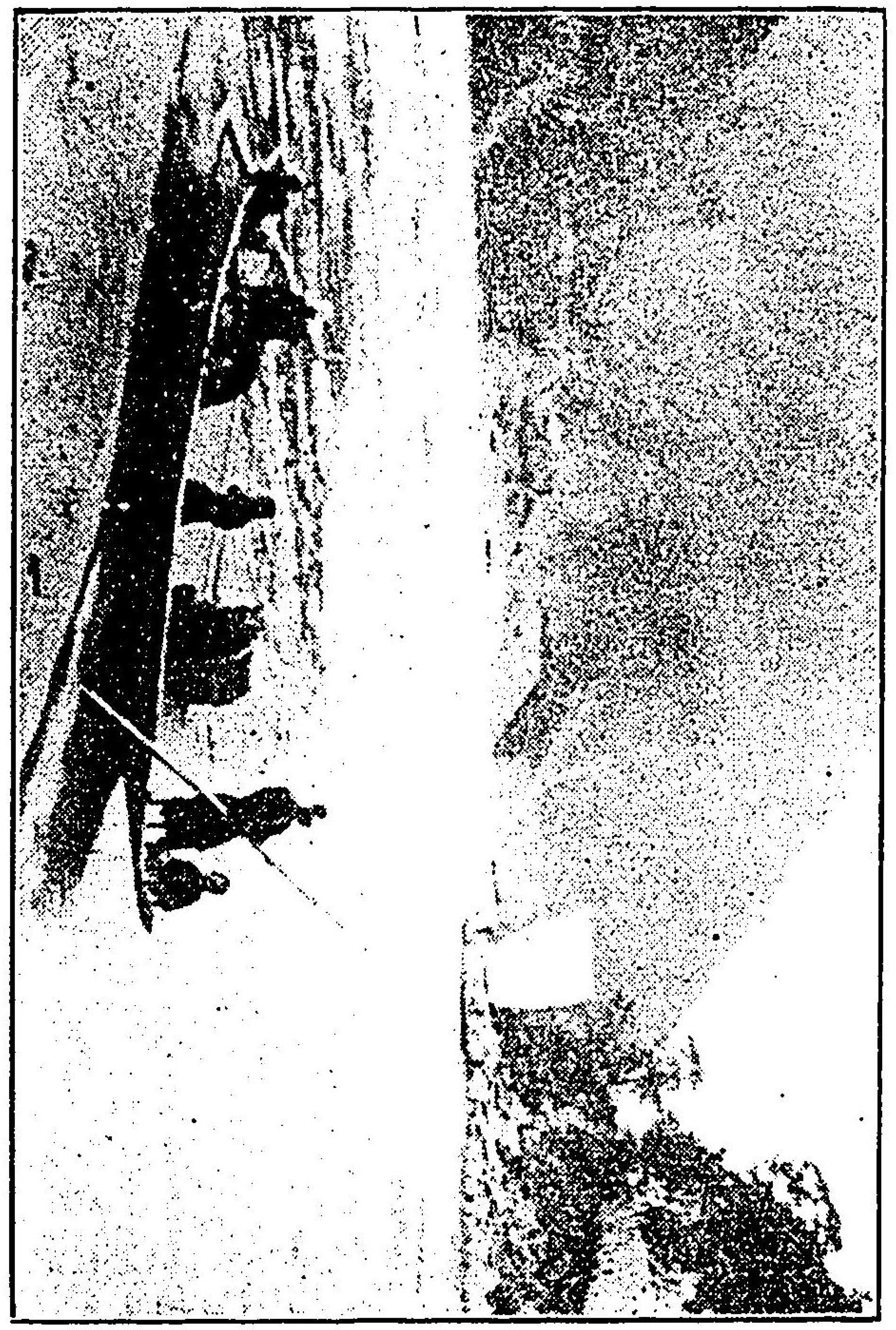
高橋古溪

小花地買舟

一曲奇於一曲奇。石皆怪異樹皆欹。
掉歌縱欠晦翁好。未必揚川劣武夷。

船頭が櫂の一撞に舟はヒラリと岸をはなれて紺碧の水を悠揚と流れて行く。麒麟橋をくゞつて數十町許下ると、江勢の少しく右に曲らんとする處に本尊岩の孤形千仭の碧落に聳ゑて猿鳥も攀づる能はず、蒼

松其黝面の上に踊る獨尊崇高の姿、人をして覺はず襟を正さしめた。其の傍は神斧鬼鑿の岩石亂立して其の中の一巉岩高さ幾百尺、呀然中空に懸つて、落ちんと欲して未だ全く落ちざるものは懸岩（かゝりいわ）の奇岩にして皺摺衣の襞の如きは衣岩（ころも）の怪岩である。顔々相對して談論將に風發せんとするものは二見岩にして、圓滿の相端然と坐せる如きものは惠比壽大黑の兩岩である。或は鳳鸞の舞ふが如く、或は虎豹の吼ゆるが如きもの老松皆赤根を露はして其の間を點綴し、奇狀萬千實に應接に遑があい。更に岩角を一轉すれば、茅屋五六、何れも碧江に枕んて、住める人と皆荆關畫中のものだ。津川小鼻地の奇景は實に此處である。レルヒ少佐はこの奇景をレンズに收めやうとしたが、水勢急にして遂に之を逸し去り、頗る殘念がつて「グレート、ロッス。グレート、ロッス」と叫んで止まなかつた。



阿賀川の下り舟

過小鼻地

伊藤香草

怒猊渇驥伏於蒐。岸崿挿空形狀殊。
寄語舟人暫停櫂。誰拈禿筆寫成圖。

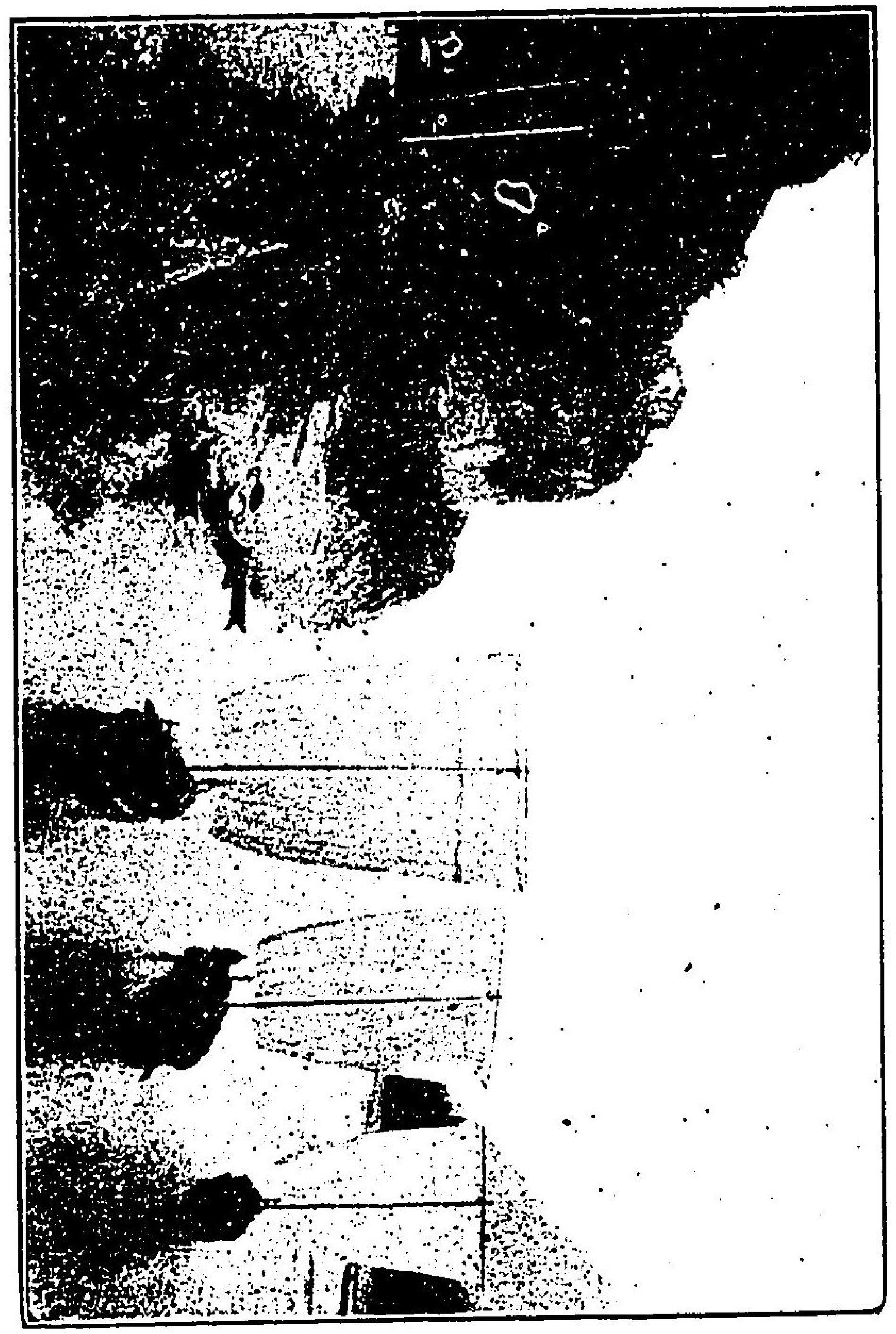
水勢暫くは緩く流るゝ中を、舟夢の如くに行く、忽ち一大岩の恰も象の鼻の如きが磊々として江畔に聳ゑてゐるのに逢うた。御前鼻の奇岩とは之ではあるまいか。幾層の峯巒山を夾み水は其の翠微を載せて緩く激しく、欸乃の聲は遠く林壑に入つて幽禽の聲と相和す。若しそれ青女一夜風霜を飛ばし、滿山の紅葉夕陽をうけて更に山下の碧水に映ずる時には、其の美觀や如何ならんと想像に堪ねんのである。暫くすると峽勢忽ち相逼つて水を扼し、兩岸の絶壁高さ數十尺、細溪石皺を走つて幾條の水簾洒々と亂石の裡に落下し、蒼苔石面を掩ひ老松槎牙として空外に舞ふて居る。急水岩角を嚙み、玉屑飛んで紛々、吁目見るべくして心己に思ふべからず、況や之を狀するをやと、一度使つ

た形容詞を又くり返さゞるを得ないのである。

ローレライ

川は曲々兩山の脚を洗ひて流脈一樣ならず、或時は潭となり、或時は淵となり、一擒一縱、移りゆく兩岸の美景と共に、この變調ある舟路は、尠なからず吾々に壯快の感を與へた。忽ち舟は激せる奔瀨に乘じて、勢騎虎の如く走り出した。水の岩石に衝るところ愕珠驚玉猥に人の衣袂を打ち、船頭は左に支へ右に撞いて巧に亂石の間を遁れた。此時船頭一度其の措を失へば、人、舟と共に紛碎さるゝのみだ。

人も知る。歐洲ライン河の中程に、絕壁千仞水緩く其下を流れて、風光の殊に美はしい處がある。底知れぬ深潭が紺碧の水を湛ねて、中に鋭き暗礁が秘めてある。或日一人の船頭偶々こゝを過ぎつゝ悄げにフト此の摩天の巖上を望むと、一個妙齡の少女が、粧を凝らして窈窕と其上に立つて居る。折からの夕日を眩げに、此方を瞰下しつゝ、黃



小松の遊帆

金の櫛を取り出でゝ、丈なす金髪を梳る風情、美しともにくしとも得で言ひやうがない。忽ち彼女は嬌喉朗かに一曲の神歌を唄ひ出した。玉の如き音聲山水の間に響いて、魚鳥も片唾(かたづ)を呑んで傾聽するかと怪まれた。船頭今や眼暗み耳遠くなりて、茫然夢の如く、唯巖頭を仰いで舟の行くところを知らない。と俄然舟は件の暗礁に衝つて粉微塵。あわれ船頭は潭底の藻屑となつて了つた。こは實にハイネが傑作「ローレライ」の一曲で、舟の此處を過ぐる時余は巖下の危きを惧れつゝ、仰いで巖頭の幻影にあこがれた。

谷澤川の小流を合せてより、水勢又緩となり、兩岸の翠巒徐ろに搖ぎ遠く重疊せる山岳には白雲が搖曳して、滿幅の淸風暑からず、寒からず、悠々として人は蓬萊に在るかと怪まれた。岩谷の麓を過ぐ。山腹千年の老杉亭々として空を突く處は余吾將軍維茂が藥師の靈佛を奉じて、淸く一生を終つたところ、吁この絕景の中に在つて、將軍の英魂永へに安眠するであろう。石間の里に近いた。こゝは戊辰の際關兵

水邊風

無名氏

川かよふ白帆すゞしと旅人の
たゝずむ峯に夕風の吹く

偶成

無名氏

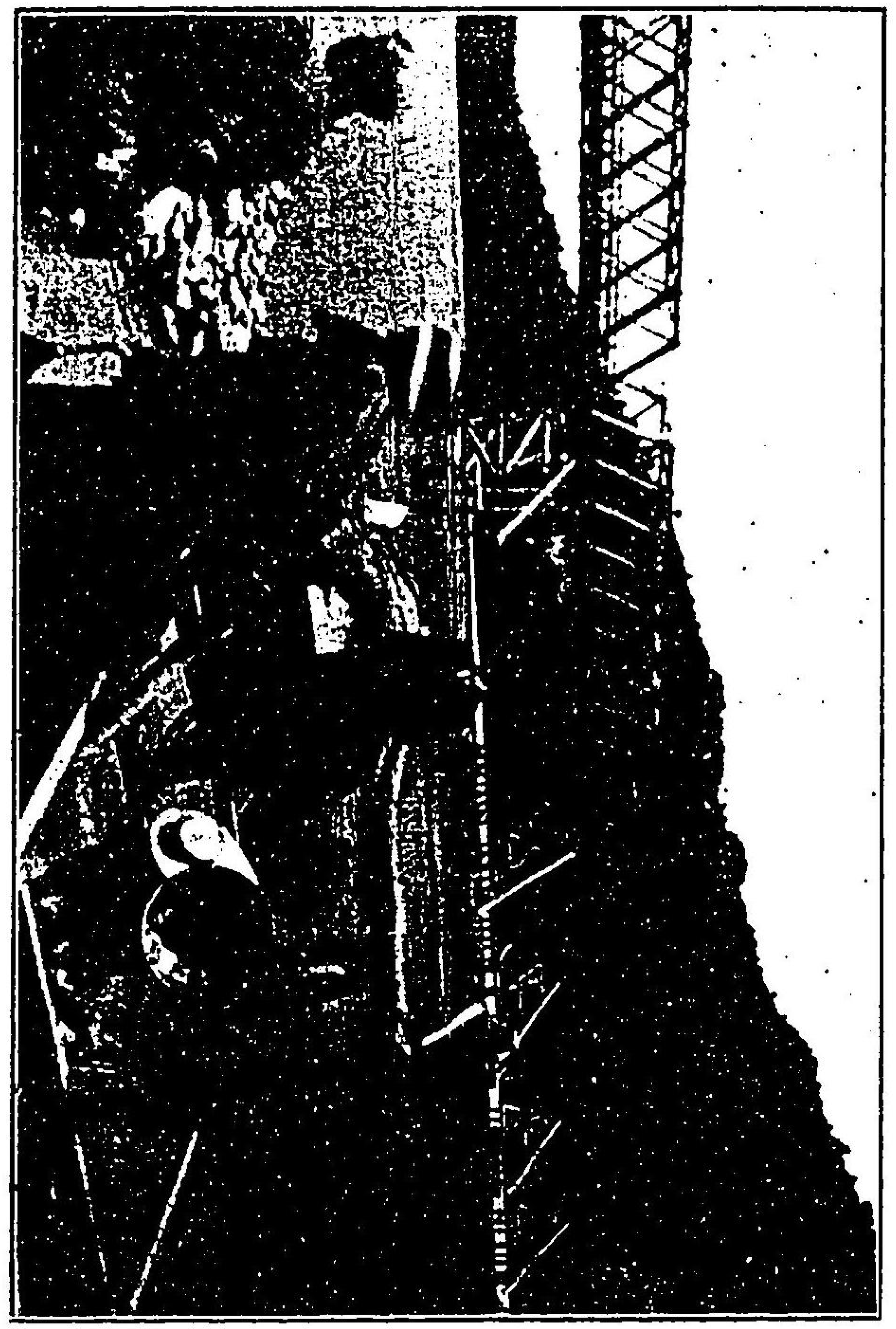
亭子南邊帶水流。
蘋風吹綠氣如秋。
檣聲相接榴花外。
競渡前津幾個舟。

の固めた處で絶壁の上に石徑を通じ、壁下の潭水深さ幾十仭、岩石列を亂して立ち、奇狀萬殊、或ものは臥牛の横はるが如く或ものは魑魎の踊るに似て、荷葉披麻、一聳一伏、碧水之に當つて忽ち白玉を散らす、實に天然の好粉本、巨匠と雖も具さに之を丹青の上に上ぼすことは出來ない。

これより小松の邊り水勢愈々緩く、眼界漸く開けて、遠山近山指呼の中に來り、白帆點々遙に翠樹の峽より紺靛(こんぜう)の水の上を遡り、咿嚘雁の如く歌唱互に答へ、神韻縹緲として、宛ら夢のやうだ。

硬語盤空

この景を叙する前日、畏友伊藤香草君余に一書を送つて其の中に津川小花地の繪葉書御送り被下御厚配難有奉謝候、津川は曾遊の地にて殊に昨年秋深又々參り、一泊、歸途阿賀川を舟にて下り申候、規模は稍小なれども、絶景は耶馬溪に劣



馬下橋と著者

らずと長三洲も申候由、云々

とあつた。香草君は目下北越詩壇の異才、この時の作だらう、錦心繡腸を披瀝してこの地の絶景を、新潟紙上に紹介されたことがあつたと、詞友畑野南山君は態々其切抜を探し出して余に示された。題は「遊津川峽」で咳珠唾玉、韻を費すこと無慮一百、實に得難きの大文字である。今この詩を得て曾遊の蹤を回想すると、小耶馬溪眼前に彷彿して、魂飛び肉躍るの快感を覺ゆる。耶馬溪の山陽に於ける如く、津川峽は香草君によつて多大の面目を施したと云ふべきである。

香草君は尙翰末に「遊津峽十二首之二」と題する一絶を添られた、

平生愛讀杜韓詩。硬語盤空皆我師。
鑿嶮縋幽君勿笑。倘今一字未能奇。

と語甚だ謙遜である。されど確にこの絶景に對しては、如何なる詩家文人も筆を擲つて同じ嗟嘆を感ずるであらう。「松島やあゝ松島や

馬下停車場

早發白帝城　李白

朝辭白帝彩雲間。千里江陵一日還。
兩岸猿聲啼不盡。輕舟已過萬重山。

下急流　無名氏

飛舟忽破碧烟過。巖角溪頭一櫂歌。
兩岸鵑花無暇望。奔流聲裡下丹波。

松島や」の無味單調の一句は、實に松島の絶景に打たれて筆を擲て覺えず發したさる文豪の嗟嘆である。而して香草君の所謂

奇景秘僻陬。誰云天所慳。
從來無由泄。仍在此裡盤。
安得倪黄手。橫披畫圖卷。
又借杜韓筆。硬語姿鑱鐫。

は余も實に同感である。今築造中の岩越鐵道は幸にして甚しく津峽の風致を害せず。而も其の完成の曉には峽上峽下の人、容易に行きてこの絶景に接するを得るであらう。又接せんことを勸める。

まだ顔を洗はないの、

正午の前十分舟は靜に馬下橋の側に著いた。二人は停車場前の一茶亭に入つて休憩し、午後一時馬下發の汽車に搭じ、五泉驛につき、此

處にて二人は過去の無事を慶び、前途の幸を祝して最後の「グッド、バイ」を云ひ換はした。レルヒ君は汽車をつゞけて新津を經、この日の中に高田へ舞ひ戻る豫定であるとか。さて余は之より村松に俥を飛ばし、雲村旅館に入りて甫めて鞋を脫ぎ棄てた。久しく讀者諸君の「眼の塵」となつた「鞋の塵」もこゝに全く拂はるゝ筈であるが、新潟に還るまで、も暫くの御辛棒を願ひをき、余は雲村に預け置きし自轉車を走らして伊藤警部を警察署に訪ひ、聯隊を訪問する時間は遂になくて、五泉驛より鐵路新潟の茅廬に著いたのは五月三十一日夕の六時であつた。夏の旅に天日に曝さるゝこと八日、好男子惜むらくは顏色焦けて銅の如く、門に俟ち居たる稚子克巳をして開口一番、

「御父さん御歸り、今日はまだ顏を洗はないの、汚いよ」

と心配せしむるに至つた。

翌々日レルヒと少佐の送り越した書中に

「この度の旅行は余が嘗て經驗したるもの〻中最も愉快なりしもの〻一なり」

と云ふてあつた。勿論余も之と同じ感想を返辭せねばならなかつた。

谿聲廣長舌
山色清淨身

岩越紀行 完

明治四十四年九月九日印刷
明治四十四年九月十一日發行

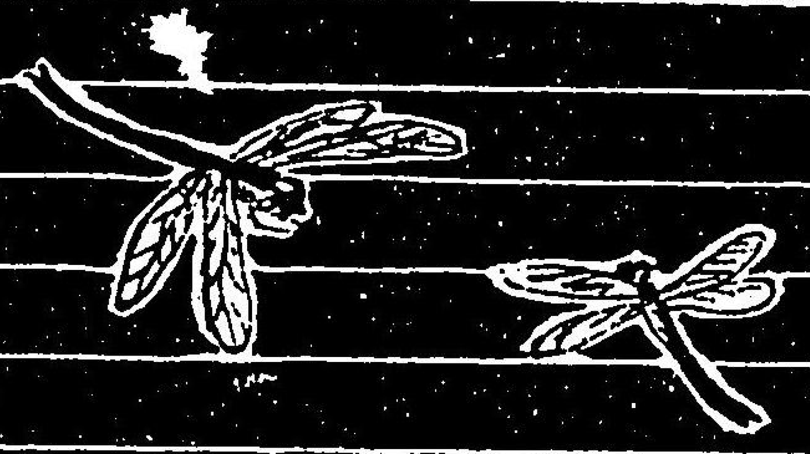
（定價貳拾錢）

編纂兼發行者　新潟市東仲通一番町　小林二郎

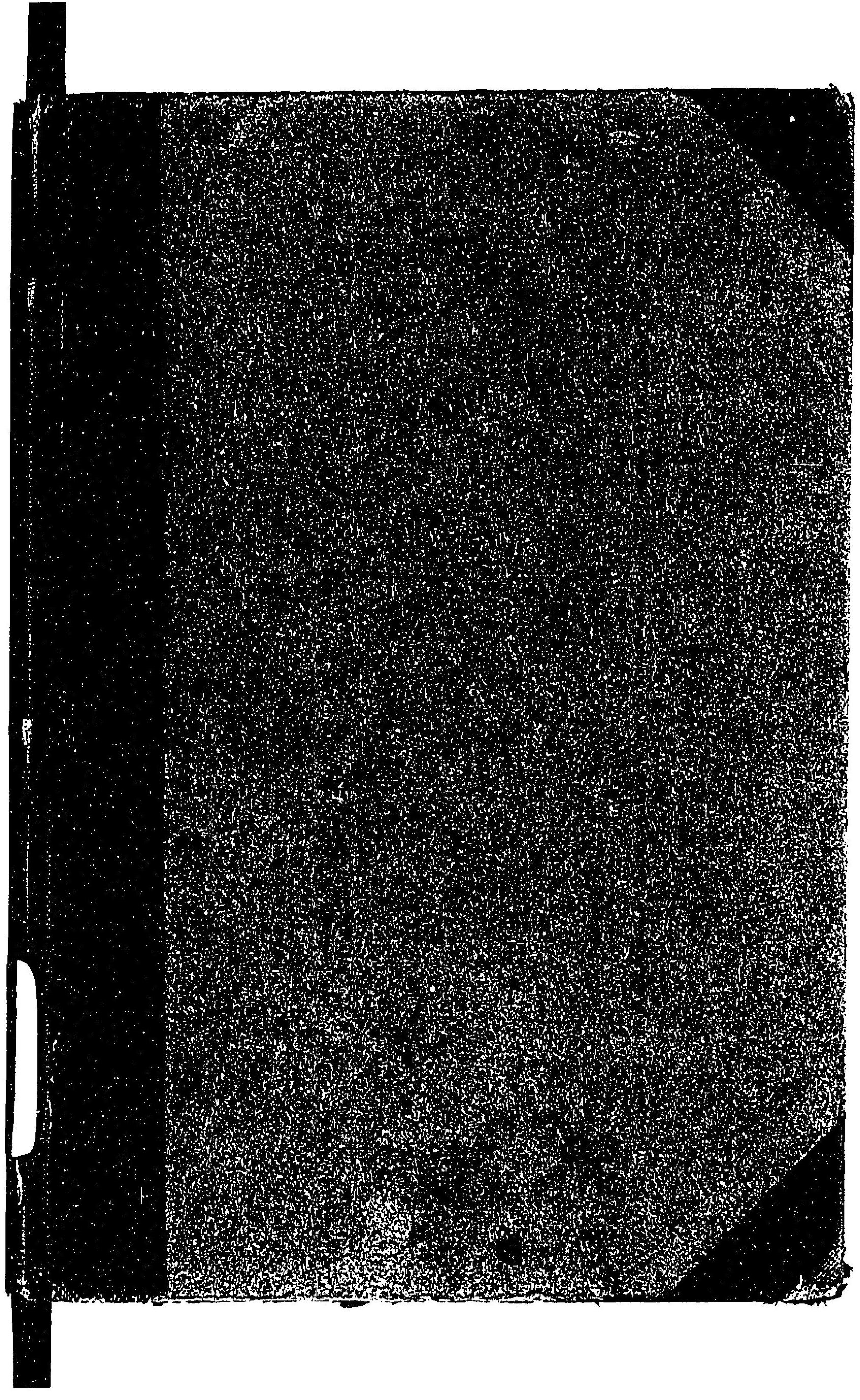
印刷者　新潟市東仲通一番町　小林晋三郎

印刷所　新潟市東仲通一番町　小林精華堂

٩٤
١٧٤٨



94
748



94
748

024485-000-4

94-748

岩越紀行

広本　賢斎／著

M44

ADC-1692